真備町埋蔵文化財発掘調査報告　1

蚊蜂遺跡

真備町市場工業団地
造成に伴う発掘調査

1999年3月

真備町教育委員会

蚊蜂遺跡全景（南から）

東蚊蜂遺跡第一地点全景（南から）

序

真備町は岡山県南西部に位置し、高梁川と小田川の下流域にあって美しい自然環境に恵まれ、豊かな沖積平野を背景に古代文化中枢の一角をなしてきました。町内には特殊器台が出土した弥生時代の西山遺跡、県下３大巨石墳のひとつ箭田大塚古墳をはじめ二万大塚古墳、天狗山古墳、竜王塚古墳など数多くの遺跡があります。

奈良時代には本町ゆかりの偉人「吉備真備」が遣唐副使として唐に渡り、帰国後天平文化に大きく貢献し、政治家、学者、国語の祖として活躍したことは内外に知られております。吉備真備公は本町町名の由来ともなっております。

近年では県南工業地帯のベッドタウンとして急速に発展してきており、平成11年１月11日には待望の井原鉄道も開通いたしました。また道路網の整備や住宅地建設、マービーふれあいセンター、保健福祉会館、12年度開館予定の町立図書館の建設など都市近郊型の自治体として、公共施設の整備がすすむことにあわせて、古い歴史と緑豊かな自然環境との調和がもとめられ、殊に先人たちが残した貴重な歴史遺産に対する認識はますます高まっています。

このような現況のなかで市場地区において工業団地が造成されることとなり、実施に先立って平成９年８月に岡山県古代吉備文化財センターの協力を得て試掘調査を行ないました。この調査で３カ所の遺跡が確認され、協議を重ねた結果、そのうち保存の困難な２カ所について西蚊蜂遺跡を古代吉備文化財センター、本町が担当する東蚊蜂遺跡については総社市教育委員会に職員の派遣を依頼して、同年９月から本発掘調査を実施する運びとなりました。

その結果、西蚊蜂遺跡からは柱穴群が確認され、東蚊蜂遺跡からは弥生時代のものと思われる竪穴住居と土壙墓が発見されました。

この報告書はこうした調査の成果をまとめたものであります。本書が文化財の保護・保存のために活用され、また学術研究の資料としてお役立ていただければ幸いと存じます。

最後になりましたが、発掘調査の実施にあたって岡山県教育庁文化課、岡山県古代吉備文化財センター、総社市教育委員会、総社市埋文学習の館の方々には多くのご教示とご指導をいただき、ご多忙のなか終始献身的なご協力を賜りました。また調査に従事した作業員の方々をはじめ関係各位から暖かいご協力とご理解をいただきました。記して厚くお礼申し上げます。

平成11年３月

真備町教育委員会

教育長　片岡　稔

例　言

1．本書は、真備町市場工業団地造成に伴い、真備町教育委員会が発掘調査を実施した「蚊蜂遺跡」の報告書である。

2．遺跡は真備町大字市場字竹ノ内368-3外に所在する。

3．確認調査は、岡山県古代吉備文化財センター江見正己課長補佐が行った。
全面調査は「東蚊蜂遺跡」を、当町の依頼により総社市教育委員会主任武田恭彰が担当し、「西蚊蜂遺跡」については岡山県古代吉備文化財センター江見正己課長補佐が行った。

4．調査面積は、確認調査が670㎡、全面調査が4,160㎡である。

5．出土遺物の整理は総社市南溝手268-3「総社市埋蔵文化財学習の館」で行い、報告書作成後は吉備郡真備町大字箭田1685「真備町公民館」に保管している。

6．本報告書の執筆は、第１章を岡山県教育庁文化課平井　勝課長補佐が行い、第２章及び付載を真備町教育委員会社会教育課藤原憲芳が行い、第３章及び全体の編集を総社市教育委員会文化財室主任武田恭彰が行った。

7．出土遺物の整理、報告書の作成にあたっては、西平登代子、近藤雅子（総社市埋蔵文化財学習の館）の協力を得た。

8．この報告書の高度値は海抜高であり、遺構実測図の方位は磁北である。

9．第２図の周辺の遺跡分布図は、国土地理院発行の25,000分の１の地図を複製したものである。

10. この報告書に関係する実測図、写真、遺物等は「真備町公民館」で保管している。

11　発掘調査から報告書の作成にあたっては、多くの研究者の方々からご教示を得た。謝意を表す次第である。

目　　次

序　　文

例　　言

第Ⅰ章　調査にいたる経緯 …… 1

第1節　調査にいたる経緯 …… 1

第2節　発掘調査の体制 …… 2

第Ⅱ章　地理的・歴史的環境 …… 3

第1節　地理的環境 …… 3

第2節　歴史的環境 …… 4

第Ⅲ章　東蚊蜂遺跡 …… 10

第1節　調査の概要 …… 10

第2節　東蚊蜂遺跡第一地点 …… 10

(1)　住居址 …… 10

(2)　土　壙 …… 14

(3)　土壙墓 …… 14

第3節　東蚊蜂遺跡第二地点 …… 31

第Ⅳ章　西蚊蜂遺跡 …… 36

第Ⅴ章　結　　語 …… 36

図　目　次

第1図　遺跡位置図 …… 3

第2図　周辺の遺跡分布図（S＝1／25,000） …… 6

第3図　東蚊蜂遺跡・西蚊蜂遺跡位置図（S＝1／1,500） …… 7

第4図　東蚊蜂遺跡第1地点遺構配置図（S＝1／300） …… 9

第5図　住居址－1（SH01）出土遺物（S＝1／4） …… 11

第6図　住居址－1（SH01）平・断面図（S＝1／60） …… 11

第7図　土壙－1（SK01）平・断面図（S＝1／30） …… 12

第８図　土壙－２（SK02）平・断面図（Ｓ＝1／30）…… 13
第９図　土壙－３（SK03）平・断面図（Ｓ＝1／30）…… 13
第10図　土壙－４（SK04）平・断面図（Ｓ＝1／30）…… 13
第11図　土壙墓－１平・断面図（Ｓ＝1／30）…… 15
第12図　土壙墓－２平・断面図（Ｓ＝1／30）…… 15
第13図　土壙墓－３平・断面図（Ｓ＝1／30）…… 15
第14図　土壙墓－４平・断面図（Ｓ＝1／30）…… 16
第15図　土壙墓－５平・断面図（Ｓ＝1／30）…… 16
第16図　土壙墓－６平・断面図（Ｓ＝1／30）…… 16
第17図　土壙墓－７平・断面図（Ｓ＝1／30）…… 17
第18図　土壙墓－８平・断面図（Ｓ＝1／30）…… 17
第19図　土壙墓－９平・断面図（Ｓ＝1／30）…… 17
第20図　土壙墓－10平・断面図（Ｓ＝1／30）…… 17
第21図　土壙墓－11平・断面図（Ｓ＝1／30）…… 19
第22図　土壙墓－12平・断面図（Ｓ＝1／30）…… 19
第23図　土壙墓－13平・断面図（Ｓ＝1／30）…… 19
第24図　土壙墓－14平・断面図（Ｓ＝1／30）…… 19
第25図　土壙墓－15平・断面図（Ｓ＝1／30）…… 19
第26図　土壙墓－16平・断面図（Ｓ＝1／30）…… 20
第27図　土壙墓－17平・断面図（Ｓ＝1／30）…… 20
第28図　土壙墓－18平・断面図（Ｓ＝1／30）…… 20
第29図　土壙墓－19平・断面図（Ｓ＝1／30）…… 21
第30図　土壙墓－20平・断面図（Ｓ＝1／30）…… 21
第31図　土壙墓－21平・断面図（Ｓ＝1／30）…… 21
第32図　土壙墓－22平・断面図（Ｓ＝1／30）…… 21
第33図　土壙墓－23平・断面図（Ｓ＝1／30）…… 22
第34図　土壙墓－24平・断面図（Ｓ＝1／30）…… 22
第35図　土壙墓－25平・断面図（Ｓ＝1／30）…… 22
第36図　土壙墓－26平・断面図（Ｓ＝1／30）…… 24
第37図　土壙墓－27平・断面図（Ｓ＝1／30）…… 24
第38図　土壙墓－28平・断面図（Ｓ＝1／30）…… 24
第39図　土壙墓－29平・断面図（Ｓ＝1／30）…… 24

第40図　土壙墓－30平・断面図（S＝1／30）…… 24
第41図　土壙墓－31平・断面図（S＝1／30）…… 25
第42図　土壙墓－32平・断面図（S＝1／30）…… 25
第43図　土壙墓－33平・断面図（S＝1／30）…… 25
第44図　東蚊蜂第二地点遺構配置図（S＝1／300）…… 29
第45図　段状遺構平・断面図（S＝1／60）…… 30
第46図　土器棺墓平・断面図（S＝1／30）…… 31
第47図　東蚊蜂第二地点段状遺構出土遺物（S＝1／4）…… 32
第48図　東蚊蜂第一地点土壙墓出土遺物（S＝1／4）…… 33
第49図　西蚊蜂遺跡遺構配置図（S＝1／300）…… 34
第50図　西蚊蜂遺跡 住居址－1　平・断面図（S＝1／60）…… 35

図版目次

図版1　1．東蚊蜂遺跡第一地点全景
2．東蚊蜂遺跡第一地点
図版2　3．東蚊蜂遺跡第一地点　住居址－1炭化材出土状況
4．東蚊蜂遺跡第一地点　住居址－1堀り上がり
図版3　5．東蚊蜂遺跡第一地点　土壙－1
6．東蚊蜂遺跡第一地点　土壙墓－10石鏃出土状況
図版4　7．東蚊蜂遺跡第一地点　土壙墓－6
8．東蚊蜂遺跡第一地点　土壙墓－9
図版5　9．東蚊蜂遺跡第一地点　土壙墓－20
10．東蚊蜂遺跡第一地点　土壙墓－25
図版6　11．東蚊蜂遺跡第一地点　土壙墓－4
12．東蚊蜂遺跡第一地点　土壙墓－5
図版7　13．東蚊蜂遺跡第一地点　土壙墓－6
14．東蚊蜂遺跡第二地点遠景（西から）
図版8　15．東蚊蜂遺跡第二地点段状遺構（西から）
16．東蚊蜂遺跡第二地点土器棺墓出土状況
図版9　17．西蚊蜂遺跡全景
18．西蚊蜂遺跡景住居址－1調査風景（南から）

第Ⅰ章　調査にいたる経緯

第１節　調査にいたる経緯

吉備郡真備町は、岡山県西部を南北に貫流する高梁川の下流西岸に位置し、東側は高梁川を挟んで清音村と、北側は総社市、西側は矢掛町と、南側は倉敷市および船穂町と接することから、ベットタウンとして人口が増加し、町勢の活性化が著しい。このため開発事業も多くなり、その予定地内に所在する遺跡との調整を図ってきたが、専門職員が配置されていないことなどもあり、文化財の保護・保存上の十分な対応が行なわれたとはいえない側面もあった。

平成９年７月中旬、たまたま市場工業団地建設予定地の近くを通りかかった考古学に関心のある一県民が、木が伐採され重機が行き交う丘陵上で、焼土とともに古墳状の不自然な高まりを発見した、と県教育庁文化課に連絡してきた。さっそく文化課埋蔵文化財係の係員が現地に赴き、表面から観察した結果、ただちに遺跡であるとの確証は得られなかったが、遺跡が所在する可能性が高く、さらに詳細な確認をする必要性を感じた。そこで、町教育委員会に遺跡が所在する可能性があることを伝えるとともに、町教育委員会を通じて町企画課に事業計画の概要を説明してほしい旨伝えた。

７月25日に町企画課と教育委員会が、県文化課へ事業計画概要の説明に訪れた。町企画課によれば、当該地は工業団地として計画され、平成９年度末には造成を完了さす予定で、平成９年度当初から工事を実施していた、ということである。

それに対し県文化課は、現状で周知の遺跡は認められないが、予定地内をほぼ南から北に向けて派生する尾根上には遺跡が存在する可能性が強いことから、確認調査が必要であることを伝えた。町としても町の事業であることから主体的に取り組む意向であったが、専門職員がいないことから県に確認調査が依頼された。

このため８月５日から８日まで急遽確認調査を実施し、３箇所の尾根筋にそれぞれ遺跡を確認した。この結果を受けて県文化課と町で協議を重ねた結果、東蚊蜂第二遺跡は公園として現状保存することにしたが、西蚊蜂遺跡と東蚊蜂第一遺跡は記録保存の措置をとることとなった。しかし、町には専門職員がいないことに加え、古代吉備文化財センターも調査員を長期に派遣する余裕がないことから、町が総社市教育委員会に専門職員の派遣を依頼して対応した。

発掘調査は西蚊蜂第二遺跡を県古代吉備文化財センターが、東蚊蜂遺跡を総社市教育委員会職員が担当し、８月６日から断続的に10月８日まで実施した。その成果は次章以下で述べられるが、重ねて要望していた専門職員が、この調査を契機に平成10年度から採用されたことは、文化財の保護行政を進める上で大きな前進といえよう。　（平井）

第2節　発掘調査の体制

平成9年度（1997年）

調査主体

真備町教育委員会　　教育長　片岡　稔
教育次長　江尻　健二
社会教育課　課長　山田　守
課長補佐　中野　正治

発掘調査

岡山県教育庁文化課
文化財保護主任　大橋　雅也　確認調査

岡山県古代吉備文化財センター
調査第1課　課長補佐　江見　正己　確認調査・西蚊蜂遺跡
主事　杉山　一雄　確認調査

総社市教育委員会
文化財室　主任　武田　恭彰　東蚊蜂遺跡

発掘調査参加者

内田　耕司　黒瀬　政弘　定森　英男　塩尻　雅男　塩田　晃雄　田中　公夫
谷口　昌弘　田村　清　徳田新須計　藤岡　章弘　森脇　靖夫　奥田　鶴子
木原トミコ　高見恵美子　中山　輝子　納元　政恵　水川　愛子　森川　浩子

整理作業者

西平登代子　近藤　雅子（総社市埋蔵文化財学習の館）

調査期間中、地権者・関係機関・町文化財保護委員をはじめ多くの方々から有形・無形のご援助を賜りました。記して謝意を表します。

第Ⅱ章　地理的・歴史的環境

第１節　地理的環境

蚊蜂遺跡は、岡山県の南西部に位置している、吉備郡真備町大字市場に所在する。

真備町は高梁川の支流である小田川の下流域に位置し、東側は高梁川を挟んで清音村、北側に総社市、南側は浅口郡船穂町と倉敷市、西側は小田郡矢掛町と接している。

緯度、経度として北緯34°35′～34°39′、東経133°38′～133°44′の間にある。

町の地形は東西に走る南北二つの山地が東は高梁川によって切られており、巨視的には南北8.7㎞、東西7.7㎞、面積44.08㎢の長方形をなし、中央を小田川が東流している。

真備町の北部は西から、鷲峰山（399.2m）・高山（384.7m）・妹山（315.0m）の三山が連なり、東に延びた丘陵をなしており、吉備高原最南端としての性格をもつ。南西側の丘陵は北側のものに比べて低く、弥高山（307.6m）を中心とした標高200m前後の山地で、斜面は急峻であり東に従い低くなっている。北側の斜面と比べその南側は、緩やかな斜面となり、倉敷市玉島の平野へと続く。

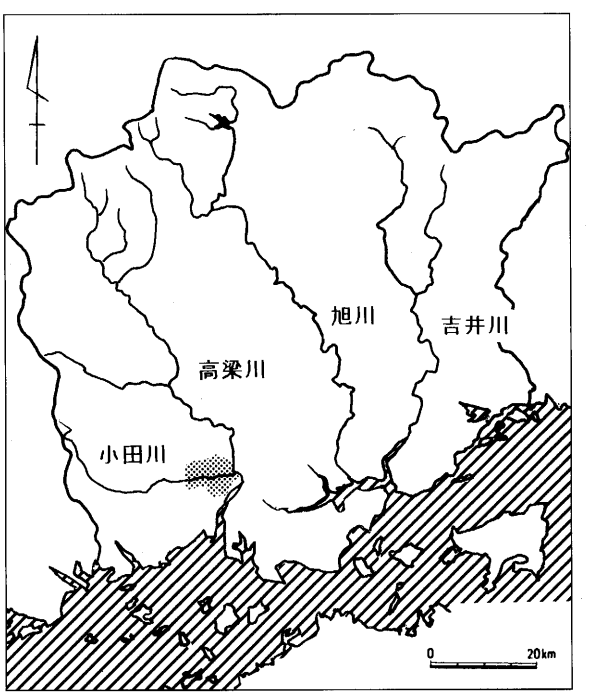
町の東端には、中国山地に源を発する岡山県三大河川の一つ高梁川が南流し、真備町を南北に分け山麓沿いに東流する小田川と、河口から約12㎞さかのぼったところで合流する。

小田川の両岸には比較的安定した自然堤防が形成されており、河口付近には沖積平野が広がり、水田などの穀倉地帯が展開している。

また真備町では、筍が特産品であり、北側の平地に近い小丘陵付近で盛んに生産され、斜面は削られて階段状になっており、地形の改変が進んでいるところが多い。

遺跡が存在する市場は、小田川の支流末政川が幅約300mの谷状地形の中央を縦貫しており、谷をとりまく山塊には古墳群が多数存在する。

蚊蜂遺跡は、末政川西岸の標高75mの古墳群を背後にもつ、北に派生した小山塊の急峻な尾根上に所在している。



第１図　遺跡位置図

第２節　歴史的環境

岡山県をほぼ南北に流れる三大河川のうち、西を流れる高梁川の下流域、総社平野は古代吉備文化の中心的な地域であった。

その西部に位置する真備町は、高梁川の最も下手で西から合流する小田川の下流域にあたる。

この地は高梁川と小田川の沖積によって、早くから安定した平野が形成され、農業に適していたことや、また古代以降は旧山陽道が小田川に沿って横断していたことなど、交通の要地でもあり、多くの遺跡を残している。

地誌的には、古代より備中国下道郡に属し、江戸時代には箭田の東部が岡山藩の領地（旧矢田村）であったほか、その他は当地の岡田藩の領地であった。明治時代に入り、明治33（1900）年に賀夜郡、下道郡が合併し（当地方は当時下道郡であった）、吉備郡と称したころは郡役所が総社にあり、当地域は吉備郡西南部と称していた。その後総社は市制を敷き、旧吉備郡の町村は岡山市や総社市、倉敷市などへ合併され、現在吉備の郡名を冠しているのは真備町のみとなっている。

なお真備町の名は、昭和27（1952）年にこの地の１町４村が合併したとき、下道郡ゆかりの奈良時代の政治家、吉備真備にちなんでつけられた[1]。

真備町内で発掘された遺跡から、先人の足跡をたどってみると、旧石器時代には当地域では遺構、遺物ともに確認されていない。縄文時代のものとしては、昭和60（1985）年に行なわれた呉妹地区の発掘調査で、後期から晩期に至る土器片がまとまって出土しており、町内では最古のものとされている[2]。

弥生時代のものは、大正４（1914）年に呉妹地区から流水文銅鐸が出土しており、東京国立博物館に所蔵されている。また尾崎地区の黒宮大塚では、特殊器台・特殊壺をふくむ多数の供献土器類が出土しており[3]、箭田の西山遺跡では、宅地造成に係わる調査で特殊器台を２個あわせて土器棺としたものが発見されている[4]。

弥生時代後期から古墳時代にかけて、真備町内では拠点となる集落遺跡の存在が未周知であったが、平成８（1996）年から平成９（1997）年にかけて行なわれた有井地区の調査で、古墳後期の竪穴住居２軒、掘立柱建物12棟の集落を思わせる遺構をふくむ弥生時代から中世に至る遺跡の存在が確認された[5]。

古墳時代には、真備町内には多くの古墳が築かれたが、その分布は大きく三地区に分けることができる。まず小田川下流域の南側の地域、末政川の流域とその東側の地域、さらに箭田から尾崎、呉妹にかけての地域である。

小田川下流域の南山を中心とした地域では、丘陵上に全長約60ｍの天狗山古墳が存在し、山

裾には45mの二万大塚古墳がある。小田川を挟んだ北側には、有井地区に龍王塚古墳がある。これは一辺約35mの方墳で、竪穴式石室を有し、石室内からは馬具などとともに直刀が一振出土しており、5世紀後半の築造と思われる[6]。箭田を中心とした地域では、矢砂に箭田大塚古墳がある。これは全長55mの張り出しをもつ円墳である。石室の全長は19.1mで、玄室に三基の組合わせ式の埋葬施設が現存している。昭和58（1983）年の調査で須恵器・土師器をはじめ鉄製品や玉類などが出土しており、築造年代は6世紀後半と考えられる[7]。箭田大塚から800mほど北に行った地点には昭和56（1981）年に調査された高津池北古墳があり[8]、7世紀後半の須恵器が出土している。

奈良時代に入ると、古墳に代わって寺院が建立されるようになる。箭田大塚の南全面に位置する箭田廃寺（現在の吉備寺）、岡田の岡田廃寺、小田川を挟んだ南岸の八高地区にある八高廃寺などがあり、備中地方を中心に出土する吉備寺式の蓮華文の瓦があり、吉備寺が所蔵している[5]。また火葬の風習が行なわれていたことを示す遺物として、市場砂走から出土したものと[9]、蚊蜂遺跡の南へ500mほど奥に入った箭田阿知境の丘陵上からも骨蔵器が出土している[10]。また呉妹地区坂本からも8世紀末から9世紀前半ごろの骨蔵器が出土している[11]。小田川を6kmさかのぼった小田郡矢掛町東三成の南側山麓から下道国勝・国依朝臣母夫人（吉備真備の祖母）銅製骨蔵器が出土しているが、これは矢掛町を含めた小田川流域の地域が下道氏本貫地として、すすんだ外来の思想を受け入れていたことを物語っている。（藤原）

註

1 岡山県吉備郡真備町「真備町史」1979年5月

2 岡山県教育委員会「蓮池尻遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』62 1986年3年

3 間壁忠彦・間壁葭子・藤田憲司「岡山県真備町黒宮大塚古墳」『倉敷考古館研究集報』第13号 1977年12月

4 真備町教育委員会『西山遺跡』1979年10月

5 岡山県教育委員会「池田散布地・石塔鼻散布地・阿知境遺跡ほか」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』135 1998年12月

6 真備町教育委員会『真備町の文化財』1996年3月

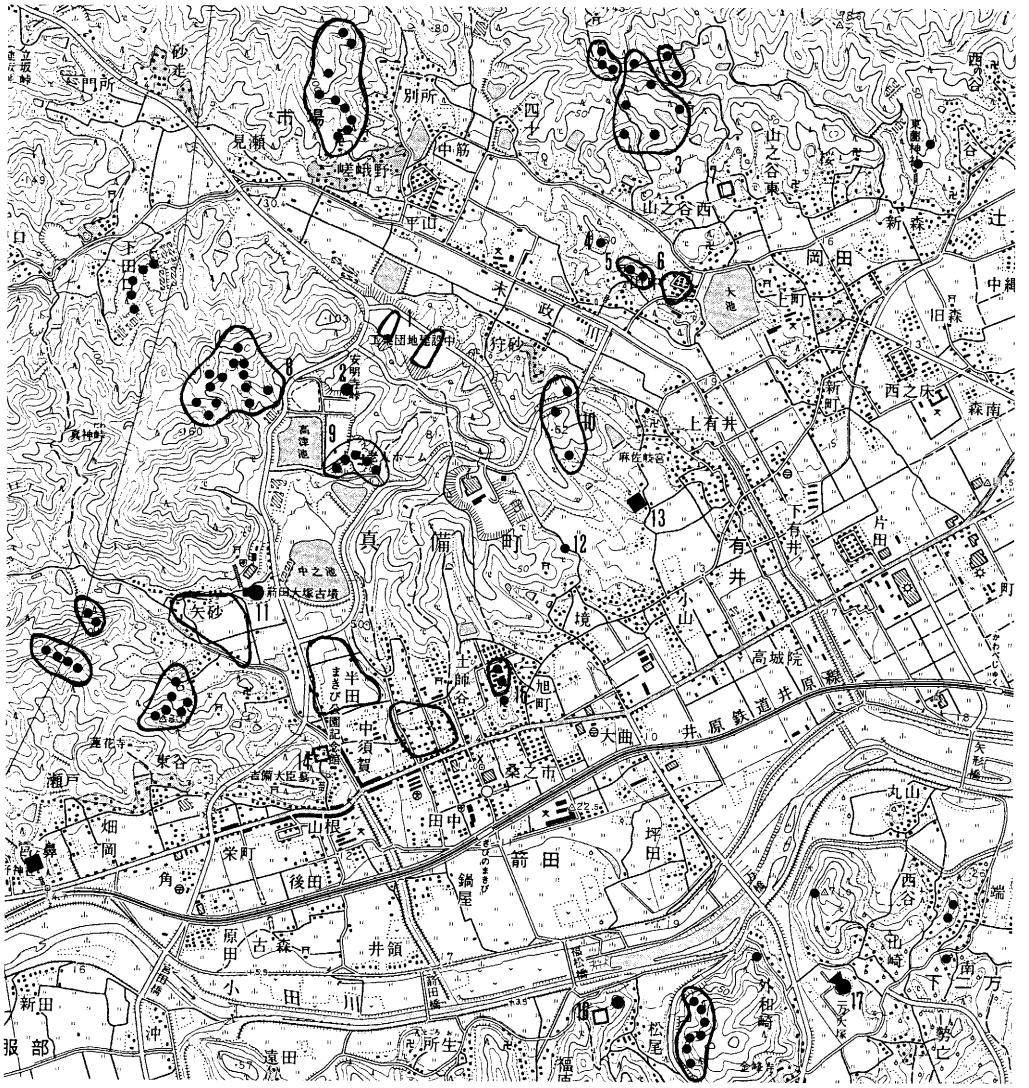
7 真備町教育委員会『箭田大塚古墳』1984年3月

8 岡山県真備町総合公園内埋蔵文化財発掘調査委員会『高津池北古墳』1982年3月

9 中田啓司「備中真備町市場の一火葬墓」『古代吉備』第3集 1959年10月

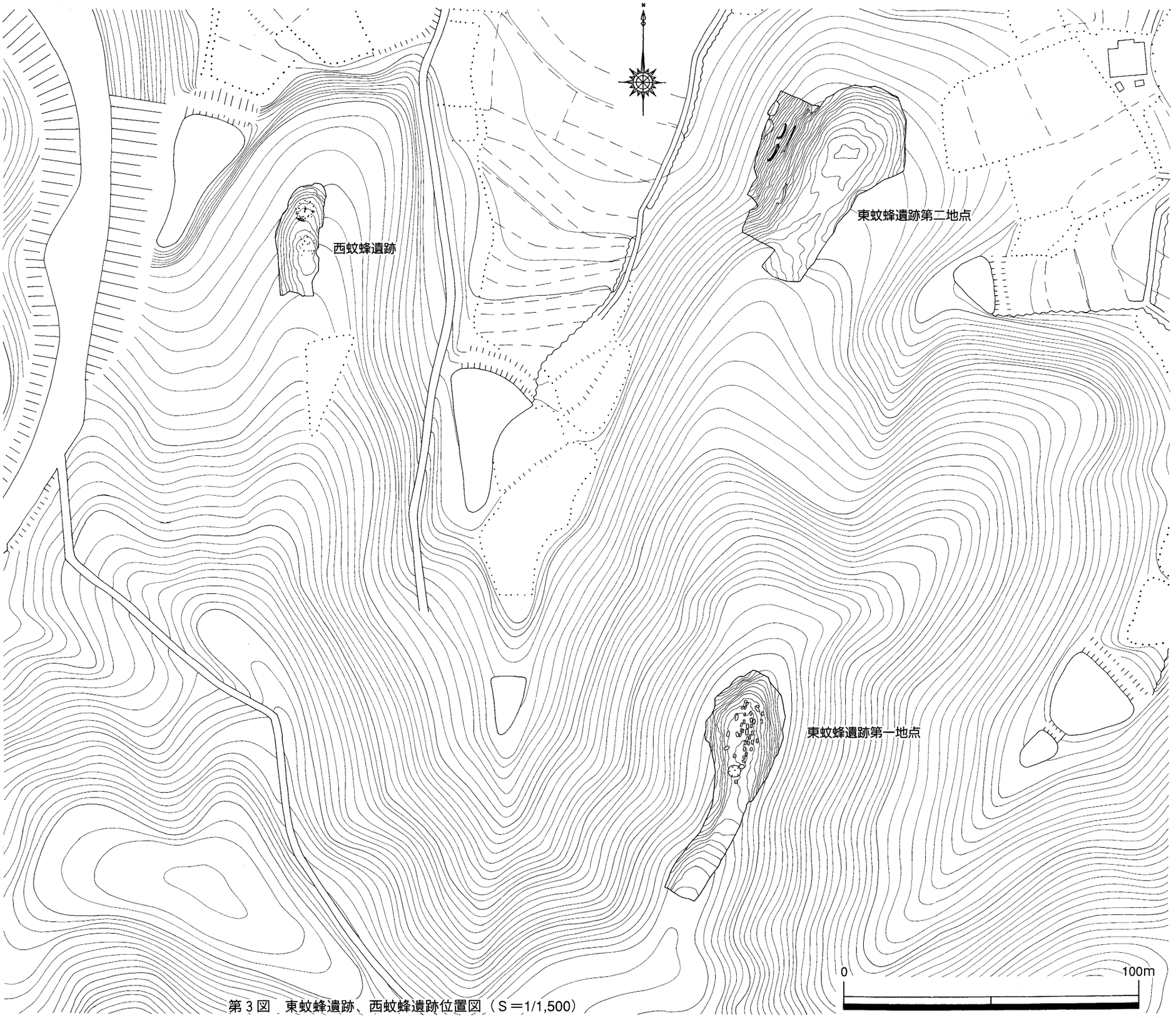
10 山磨康平「真備町箭田阿知境奥出土の骨蔵器」『古代吉備』第10集 1988年4月

11 間壁葭子・近藤益二「真備町妹坂本骨蔵器」『倉敷考古館研究集報』第16集 1981年6月

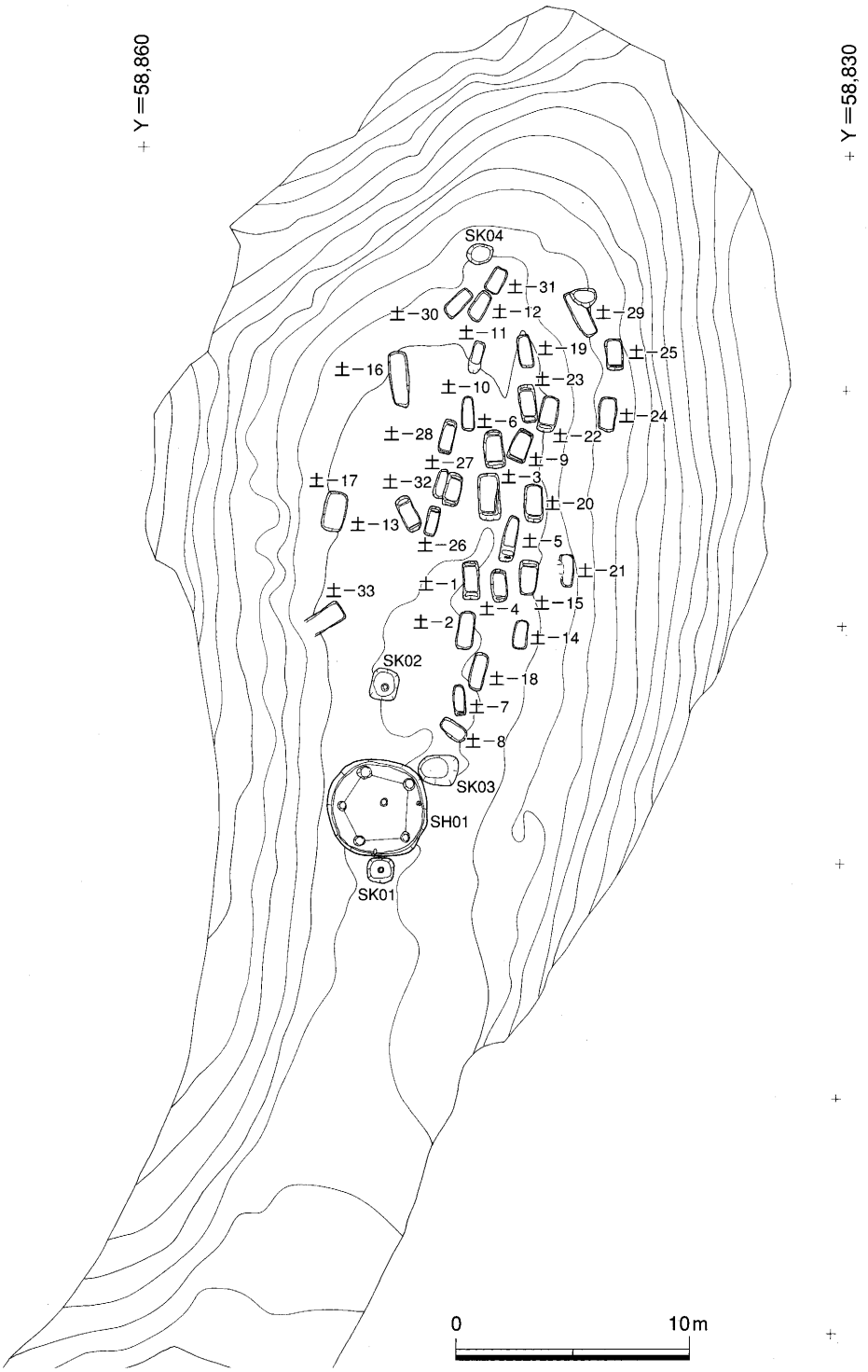


1　蚊蜂遺跡
2　高津池北古墳群
3　山之谷古墳群
4　田中塚古墳
5　田中古墳群
6　宮造田遺跡
7　岡田廃寺
8　高津池古墳群
9　皿池古墳群
10　有井古墳群
11　箭田大塚古墳
12　阿知境遺跡
13　龍王塚古墳
14　箭田廃寺
15　西山遺跡
16　松尾廃寺
17　二万大塚古墳

第２図　周辺の遺跡分布図（1/25,000）



第３図　東蚊蜂遺跡、西蚊蜂遺跡位置図（Ｓ＝1/1,500）



第 4 図　東蚊蜂遺跡第 1 地点遺構配置図（S＝1/300）

第Ⅲ章　東蚊蜂遺跡

第１節　調査の概要

今回、調査の対象となった蚊蜂地区は、吉備高原の南端にあたる春山から東に派生して総社市域との境をなす尾根の東側に位置している。遺跡は末政川によって浸食された南東に細長く伸びる平野部に面し、幾筋も支脈状に派生した尾根上に所在している。

確認調査により遺跡の存在が明らかになった地点は、東蚊蜂遺跡第一地点が標高75m前後の急峻な痩せ尾根であるが、他の二地点は標高45～55mの緩やかな裾部に位置している。

しかしながら、確認調査が実施された時点では、すでに造成工事がかなり進行しており、谷部や他の尾根斜面の遺構の有無について完全に把握できたとは言い難い。

発掘調査は工事工程の都合から、切り下げに時間のかかる東蚊蜂遺跡第一地点より着手し、調査期間の短縮のため、重機を用いて表土を除去した後に人力で遺構の検出を行った。

調査は東蚊蜂遺跡第一地点が総社市教委、東蚊蜂遺跡第二地点を県教委文化課と総社市教委、西蚊蜂遺跡を県古代吉備文化財センターが分担して行った。

第２節　東蚊蜂遺跡第一地点

本調査区は主尾根から派生する痩尾根上に位置し、調査前の地形の概観では尾根の鞍部は平坦な印象があったが、樹木の伐採後に表土を除去したところ、投棄された産業廃棄物が大量に埋められていることが判明し、重機で撤去を行い旧地形を復元した。

復元した旧地形は、平坦面は先端近くのみで広がっており、確認調査で住居址・土壙が検出されたのもその周囲である。この主尾根との連結部一帯では入念な精査を行ったが、遺構の存在は認められず、当初より存在しなかった可能性も高い。

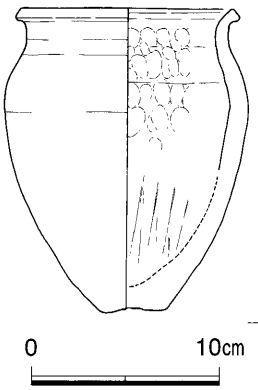
東蚊蜂遺跡第一地点では弥生期の住居址１軒の他、土壙４基、土壙墓35基の存在を確認し、調査を実施した。

⑴　住居址（SH01）

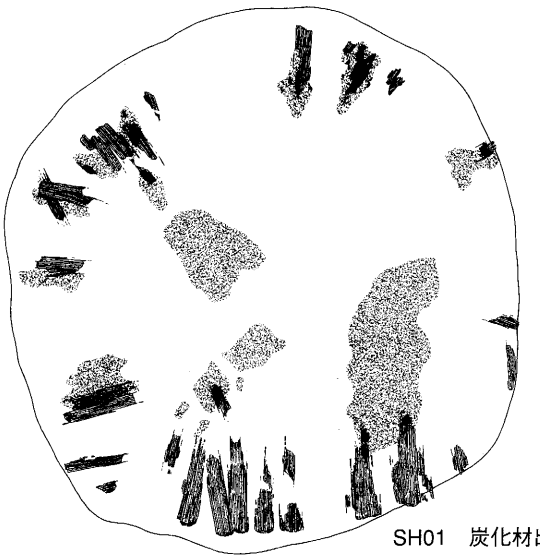
本調査区に於いて、今回確認された住居址はSH01のみであり、他に丘陵部に所在する弥生期の集落遺跡に、通常みられる段状遺構も確認されず、住居は単独で存在している。

SH01は北に伸びる尾根の頂部から、やや南に下がった稜線上の平坦面に位置しており、確認調査時に、焼土と炭化材を大量に含む覆土の輪郭が検出され、その存在が明らかになっていた。

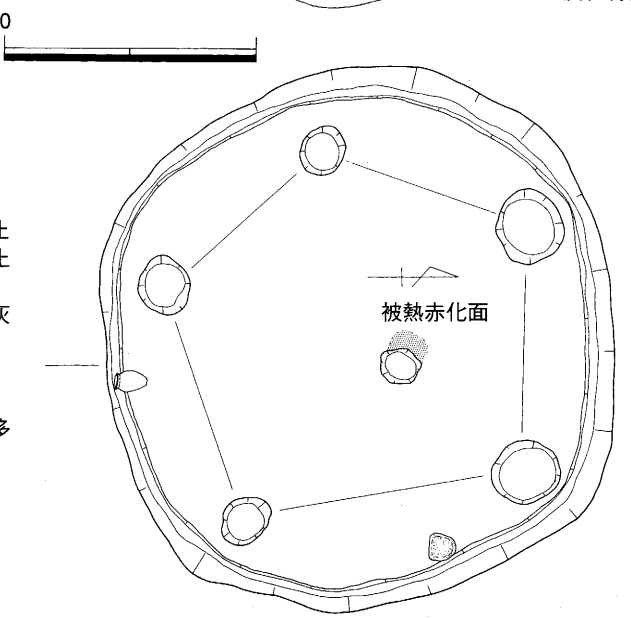
SH01は、前述のように覆土に炭・焼土が顕著に含まれ、検出時に壁が被熱赤化した部分を確認したため、焼失住居の可能性が想定された。このため、覆土の掘り下げにあたっては、住



第５図　住居址－１（SH01）
出土遺物（Ｓ＝1/4）

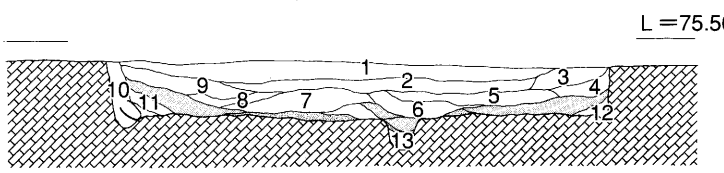


SH01　炭化材出土状況



1　細かい粘質の暗黄灰色土
2　礫を多く含む暗黄色土
3　荒い淡黄灰色土
4　細かくしまった淡黄灰色土
5　荒い黄灰色土
6　荒い淡黄灰色土
7　淡黄灰色土、焼土を多く含む
8　暗黄褐色土
9　やや明るい暗黄色土
10　淡黄灰褐色土
11　礫が多い淡黄灰色土
12　細かい淡黄灰色土

スクリーントーンは炭・灰



第６図　住居址－１（SH01）平・断面図（Ｓ＝1/60）

居の構築材が炭化した状況を把握することに主眼を置いて調査を進めた。

住居址の覆土は、中央部付近では周辺から流れ込んだ細かい地山土がレンズ状に堆積しており（第6図）、炭・焼土は少なく床面上にも明瞭な炭化材は遺存していない。

これに対して壁近くには、全周にわたり比較的厚い焼土層と炭化材が遺存しており、焼土層を除去すると炭化材が壁から床面にかけて崩れ落ちた状態が検出された（第6図）。炭化材は中央部から放射状に広がっていることから、木材が構架された状態を留めながら焼け落ちたとみられ、この場合、炭化材を覆う焼土層は屋根上の塗り土の可能性も考えられる。

また、住居の中央部付近では焼土や炭化材が殆ど遺存していなかったが、この点は屋根上の覆土が存在しないため構築材が燃え尽きた可能性が考えられ、住居の構造に起因するとみることもできよう。

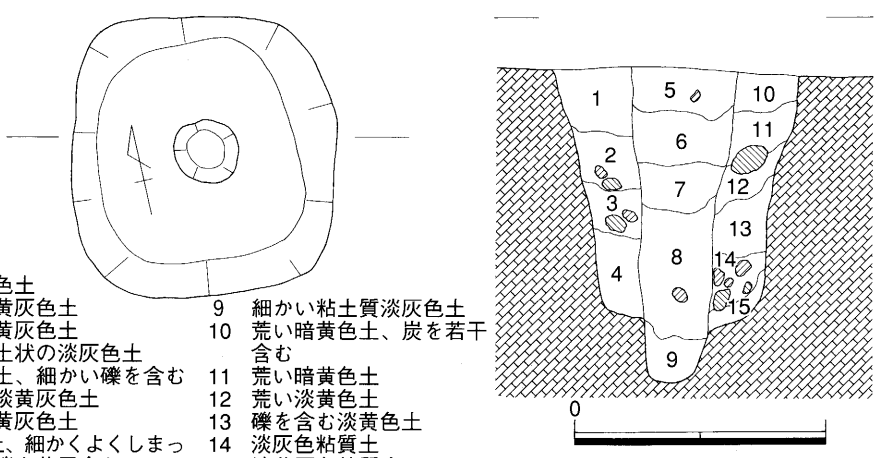
焼土・炭化材を取り除いた後に明らかになった竪穴住居の規模は、400×430cmの不整な円形を呈し、床面積は約14.5㎡である。住居址は表土直下で検出できたため遺存状況が良好であり、壁高は40cm前後が残存し、壁際には幅10cmの浅い壁体溝が全周に巡らされている。

床面上で検出された柱穴は5本で、直径60～40cm、深さ50～60cmを測り、柱穴断面の痕跡から柱の径は20cm程度と推定される。

また、中央穴は住居の中心からやや東寄りに位置し、直径25cm深さ25cmを測り、その断面の上層は崩れ落ちた炭と焼土であるが、下層は炭・灰混じりの細かい黄褐色土であった。

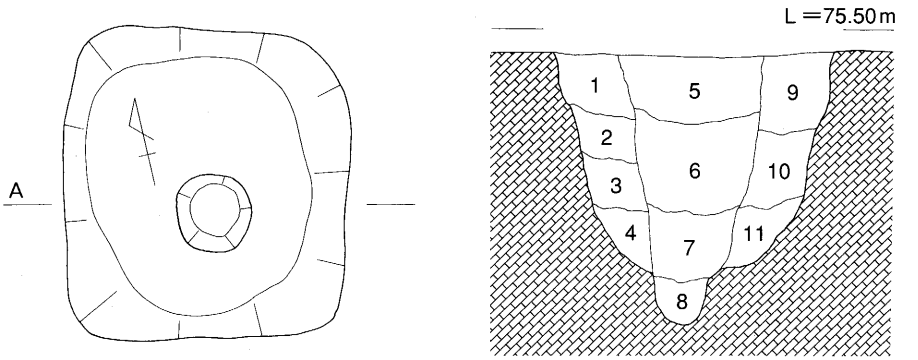
中央穴の周囲の床面は一部が被熱赤化しているが、被熱痕跡が住居の使用時か火災によるものかは判断できなかった。

住居址に伴う遺物は、壁際の床面上から被熱で風化した台石と甕（第5図）が各一固体出土した他は皆無であり、退去にあたり片付けられた可能性が高く、甕は意図的に放棄されたとも推定できる。住居の時期は甕の形態からみて、弥生後期初頭と考えることが妥当であろう。



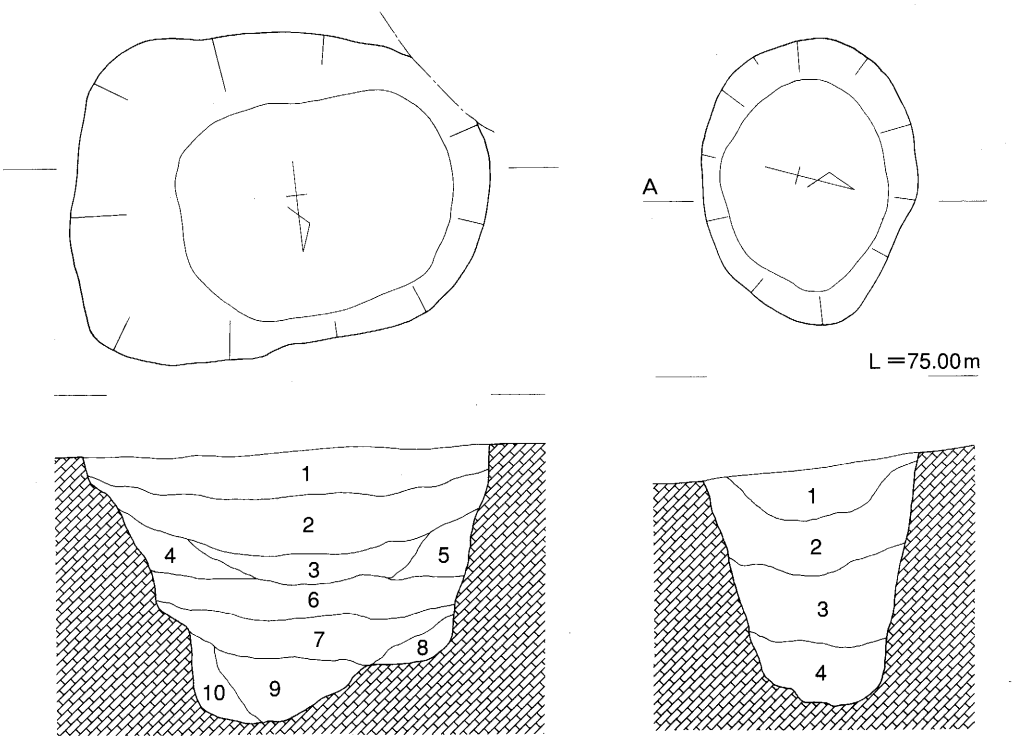
1　荒い淡黄色土
2　細かい淡黄灰色土
3　細かい淡黄灰色土
4　細かく粘土状の淡灰色土
5　淡黄灰色土、細かい礫を含む
6　少し荒い淡黄灰色土
7　細かい淡黄灰色土
8　淡黄灰色土、細かくよくしまっている。礫を若干含む
9　細かい粘土質淡灰色土
10　荒い暗黄色土、炭を若干含む
11　荒い暗黄色土
12　荒い淡黄色土
13　礫を含む淡黄色土
14　淡灰色粘質土
15　淡黄灰色粘質土

第7図　土壙－1（SK01）平・断面図（S＝1/30）



1　荒い淡黄灰色土
2　礫を含む淡灰色土
3　礫を含む灰色土
4　礫を含む黄灰色土
5　しまりのない淡灰色土
6　細かくしまった淡黄灰色土
7　礫を含む淡黄灰色土
8　灰色粘質土
9　荒い淡黄灰色土
10　礫を含む淡灰色土
11　細かい淡灰色土

第８図　土壙－２（SK02）平・断面図（Ｓ＝1/30）



1　礫を多く含む、荒い淡黄灰色土
2　礫を含むやや荒い淡黄灰色土
3　礫を含む細かい淡黄灰色土
4　細かい淡黄灰色土
5　細かい暗黄灰色土
6　シルト状の淡灰色土粘土層
7　よくしまり、シルト層を含む荒い暗黄色土
8　細かい暗黄色土
9　よくしまった細かい暗黄色土
10　暗黄色シルト層

第９図　土壙－３（SK03）平・断面図（Ｓ＝1/30）

1　礫を含む荒い淡黄灰色土
2　細かい淡灰色土
3　シルト状の細かい淡黄灰色土
4　荒くしまりのない淡黄灰色土

第10図　土壙－４（SK04）平・断面図（Ｓ＝1/30）

(2) 土　壙

東蚊蜂遺跡第一地点の尾根上ではSK01～04の４基の土壙が確認されたが、この内01～03はSH01に近接して検出されたため住居に関係する遺構の可能性が考えられた。

SK01（第７図）は住居の南側に近接しており、平面形は直径約１ｍの隅丸方形を呈し、深さは中央部の円形の堀り込みでは125cmを測る。土壙の土層断面には直径25cm程度の柱痕跡と、礫混じりの地山土を突き固めた埋土が明瞭に確認されたため、用途不明ながら柱穴であると判断した。

SK02（第８図）は住居の北３ｍに位置し、平面形は130×110cmの隅丸方形を呈する。深さは中央部の円形の堀り込みで110cmを測る。土層断面にはSK01と同様に直径20～40cmの柱痕が認められ、埋土も同様の状態であり柱穴と考えられる。

この二つの土壙を柱穴と認識した時点で再度、周辺を精査したが他には検出されず、削平による消滅も考慮しにくいため、規模・埋土は類似しているものの、直線で約７ｍ以上離れている柱穴から建物の存在は想定しがたい。

また、SK01は通常の建物から考えると柱の太さに較べて土中がかなり深く、尾根上で強風がある立地を考慮すれば建物等の構造物より、むしろ一本だけで立つ必要のある幟の柱的な性格を想定することが妥当であると考える。

これらの柱穴の時期としては遺物は皆無であるが、SK01の柱痕に、近接する住居址の炭・焼土が含まれないため住居が焼失する以前に柱が立ち腐れ、埋没していたことは確実であることから弥生時代後期以前の所産と考えられる。

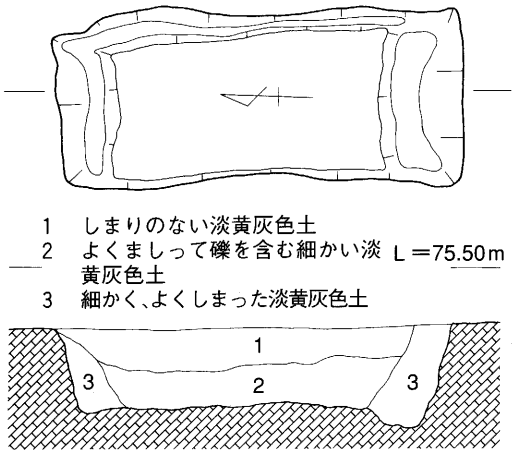
SK03（第９図）はSH01の東側に接して掘り込まれ、平面形は160×130cmの不整な円形を呈している。深さは約110cm程度で土層断面の下半にはシルト状の粘土が堆積しており、上半は周囲から流れ込んだ礫混じりの地山土である。土層下半の粘土層は土壙が開口していた時期があったことを示しており、近接する住居の炭・焼土が認められない点から住居の焼失時には埋没していたと考えられる。土壙に伴う遺物としては粘土中から磨滅した台石が出土したのみであり、住居と関連する遺構の可能性は高いが貯蔵穴と断定はできず具体的性格は不明である。

SK04（第10図）SK04は調査区北端の緩斜面に位置し、平面形は長径115cmの楕円形を呈する。残存する土壙の深さは最深部で約90cmを測り、土層断面からは周囲から流入した地山土により徐々に埋没したことが看取されるが、遺物が皆無のため詳細な時期・性格は不明である。

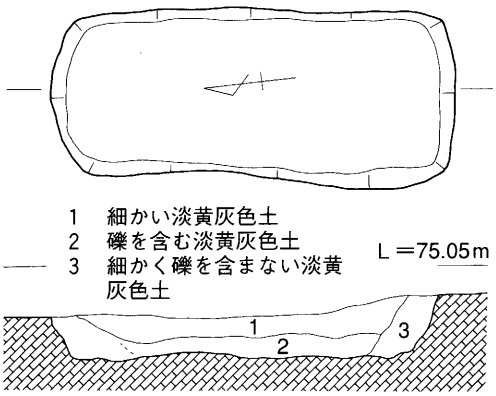
(3) 土壙墓

今回、尾根上で調査した土壙墓は33基で、大半が南北方向の尾根稜線に主軸を平行させて掘られており、切り合い関係が確認されたものは１基のみで、他は列状に間隔を保っている。

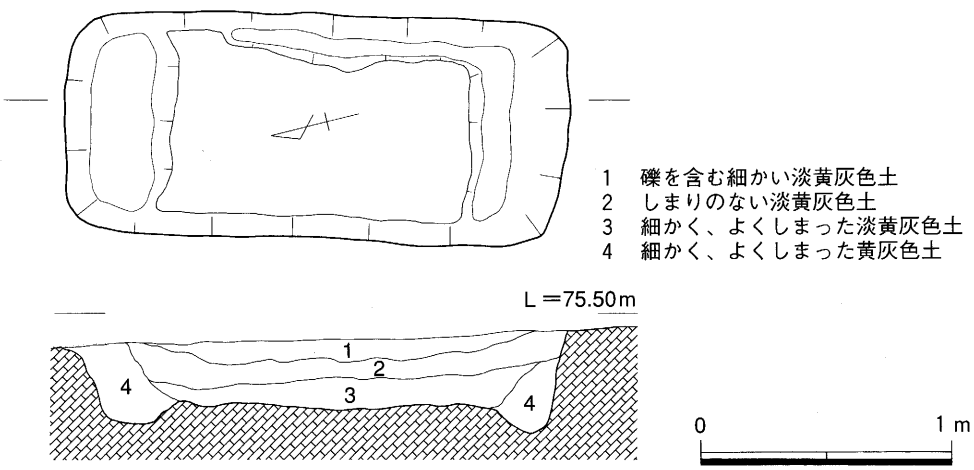
１）土壙墓－１（第11図）は尾根頂部の土壙墓群の中心に位置し、長軸160cm、幅70cmの長



第11図　土壙墓－１平・断面図（S＝1/30）



第12図　土壙墓－２平・断面図（S＝1/30）



第13図　土壙墓－３平・断面図（S＝1/30）

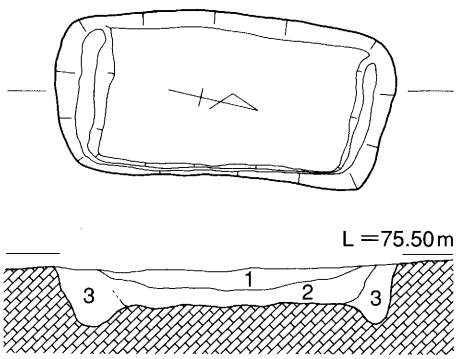
方形を呈し、床面両小口と東側に溝をもち、長軸の小口溝間の内法床面長は104cmを測る。

土壙の床面は、当遺跡の墓壙の共通の在り方であるが、地山の礫混じりの山砂利層を掘り込んでいるため整美とした水平とはならず、凹凸が激しく壁面も垂直ではない。

今回、調査した33基の土壙墓の内、両小口と側面に溝を有する、若しくは遺存することを明瞭に確認できたのは、本土壙と土壙墓－３・４のみである。

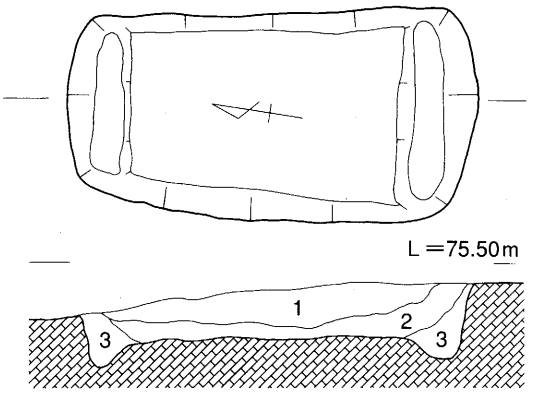
２）土壙墓－２（第12図）は土壙墓－１と長軸を揃えて南に隣接して掘られている。平面形態は長軸160cm、幅70cmの隅丸長方形を呈し、深さ18cm～25cmが遺存している。床面には明瞭な小口溝は掘られていないが、土層断面からは細かい流入土と若干の窪みが認められる。

３）土壙墓－３（第13図）は土壙墓－１の北側に長軸方向を揃えて掘られており、尾根頂部



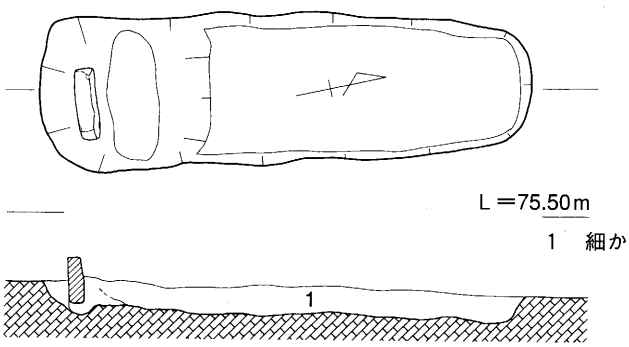
1　礫を含む、淡黄灰色土
2　細かい淡黄灰色土
3　細かく、よくしまった淡黄灰色土

第14図　土壙墓－4平・断面図
（S＝1/30）



1　礫を少量含んだ細かい淡黄灰色土
2　細かく、よくしまった淡黄灰色土
3　細かく、よくしまった淡灰色土

第16図　土壙墓－6平・断面図（S＝1/30）



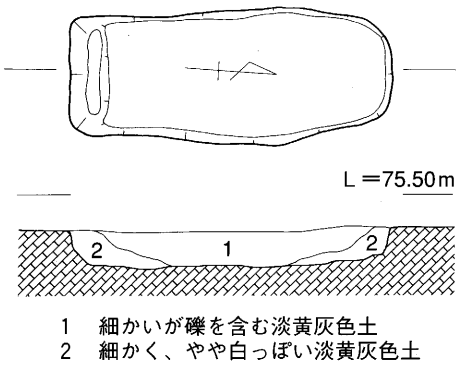
1　細かい淡黄灰色土、礫を多く含む

第15図　土壙墓－5平・断面図（S＝1/30）

が若干、北に下降し始める稜線上に位置している。平面形態は長軸200cm、幅90cmの隅丸長方形を呈し、壁は深さ26cm～40cmが遺存している。床面両小口には深さ10cmの溝と東側のみに浅い溝をもち、長軸の小口溝間の内法床面長は125cmを測る。

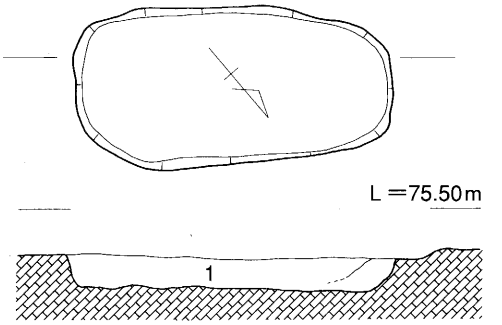
4）土壙墓－4（第14図）は土壙墓－1の東隣に長軸方向を揃えて掘られており、平面形態は長軸135cm、幅66cmの隅丸長方形を呈している。土壙は深さ22cm～14cmが遺存してり、ほぼ水平の床面の両小口と東側に細く浅い溝を有している。

5）土壙墓－5（第15図）は前後に隣接する土壙墓－3・4とはややずれる長軸方向をとり、平面形態は長軸195cm、幅60cmの隅丸長方形を呈する。残存状況は良好ではなく、深さ10cm～15cmが遺存するのみである。南辺には幅の広い小口溝をもち、板材を固定したとみられる偏平な石材が遺存していた。



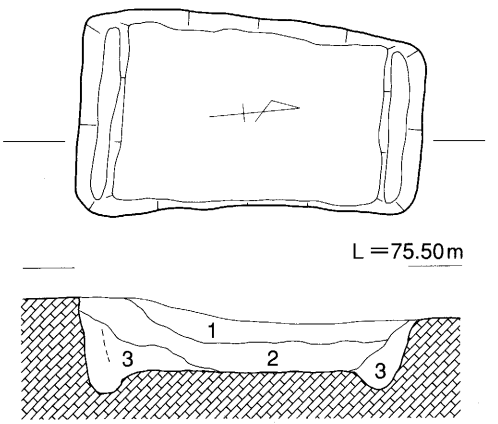
1　細かいが礫を含む淡黄灰色土
2　細かく、やや白っぽい淡黄灰色土

第17図　土壙墓－7平・断面図（S＝1/30）



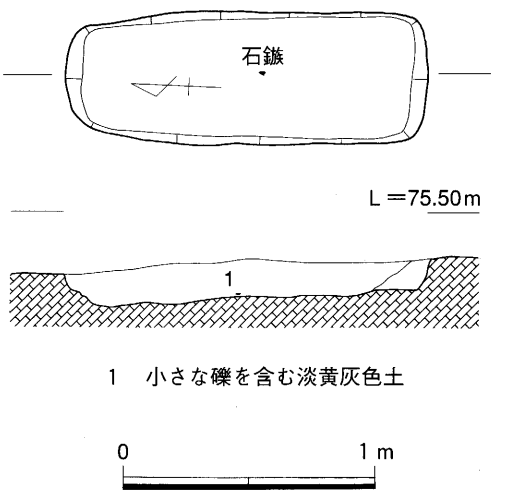
1　礫を含む細かい淡黄灰色土

第18図　土壙墓－8平・断面図（S＝1/30）



1　荒くしまりのない淡褐色土
2　礫を含む淡黄灰色土
3　細かく、しまりのある淡黄灰色

第19図　土壙墓－9平・断面図（S＝1/30）



1　小さな礫を含む淡黄灰色土

第20図　土壙墓－10平・断面図（S＝1/30）

6）土壙墓－6（第16図）は土壙墓－3の北隣に長軸方向を揃えて位置している。平面形態は長軸160cm、幅83cmのやや歪な隅丸長方形を呈する。残存する深さは15cm～30cmで、下降する北側は流失が著しいが、床面の両小口につく溝は明瞭に遺存している。

7）土壙墓－7（第17図）は土壙群の南端に位置し、土壙墓－1・2と長軸方向を揃えて縦列している。規模は比較的小型で、長軸127cm、幅52cmを測り、平面形態はやや歪な隅丸長方形を呈する。残存する深さは15cm弱で南側の小口に浅い溝がつき、床面はほぼ水平である。

8）土壙墓－8（第18図）は土壙群の南端に位置するが、長軸の方向は隣接する他の土壙墓とは異なり、やや西に振っており南側のSK03との間隔を考慮した結果とも考えられる。

規模は比較的小型で、長軸125cm、幅63cmを測り、平面形態はやや歪な長丸長方形というより長楕円形に近い。残存する深さは10cm弱で、東側の小口に浅い溝の痕跡ともみれる窪みが微

かに認められるが明確ではない。

9）土壙墓－9（第19図）は土壙群の中央に位置するが、長軸の方向は隣接する他の土壙墓とは異なりやや東に振っている。平面形態は長軸135cm、幅75cmの比較的整美な長方形を呈する。残存する深さは40cm～18cmで、北側にやや下降するため床面も若干低くなる。床面の両小口には明瞭に溝が遺存しており、長軸の小口溝間の内法床面長は102cmを測る。

10）土壙墓－10（第10図）は土壙墓群のやや北よりに位置し、平坦な尾根稜線が下降し始める緩斜面に掘られている。土壙の長軸方向は同列に並ぶ土壙墓－26～28とはやや異なり、東に隣接する土壙墓－3・6と同じ方向をとる。平面形態は長軸143cm、幅53cmの隅丸長方形を呈し、深さ12cm～15cmが残存しているが、小口に溝は認められない。土壙中央部の床面直上からは石鏃が出土しており、被葬者の体に射ちこまれたものが遺存した可能性が高い。

11）土壙墓－11（第21図）は土壙墓群の北端近くのやや下降する緩斜面に位置し、長軸は列状に並ぶ土壙墓－26～28と同一方向である。平面形態はやや歪な長楕円形を呈し、長軸145cm、幅47cm深さ15cm程度が残存しており、ほぼ水平な床面には小口溝は認められない。

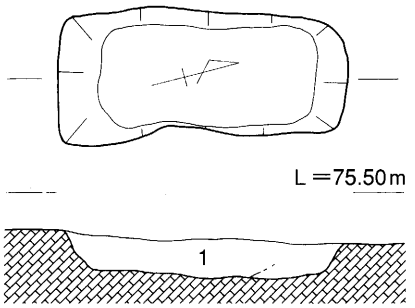
12）土壙墓－12（第22図）は土壙墓群北端の緩斜面に位置する一群に属し、土壙墓－31とほぼ接する間隔で縦列するように掘られている。平面形態は長軸125cm、幅65cmの隅丸長方形を呈し、壁の深さ25cm～13cmが残存している。土壙の床面はほぼ水平で、南側の小口に微かな窪みが認められる程度で、明瞭な小口溝は存在しない。

13）土壙墓－13（第23図）は土壙墓群西端に位置するが、近接する一群の土壙墓とは長軸の方向を違え、等高線に交わるように西に振って掘られている。土壙の平面形態は長軸153cm、幅65cmの隅丸長方形を呈し、壁の深さ45cm～28cmを測り、残存状況は比較的良好である。床面は北西にやや下降するが、両小口に浅い溝が遺存し、長軸の小口溝間の内法床面長は95cmを測る。

14）土壙墓－14（第24図）は土壙墓群の南東端に位置し、土壙の長軸は列状に並ぶ土壙墓－15・20と同一方向をとる。平面規模は土壙墓群中最小で、長軸122cm、幅58cmの隅丸長方形を呈し、斜面が東に下降し始めるため、遺存する壁の深さは10cm程度で残存状況はよくない。

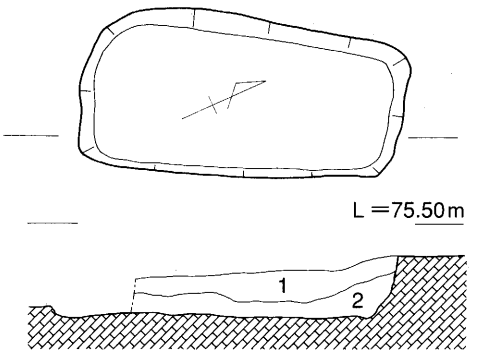
15）土壙墓－15（第25図）は土壙墓群の中央東寄りに位置しており、土壙墓－14・20と長軸方向を合わせて縦に並び、土壙墓－1・4とも等間隔で並列している。土壙の平面形態は長軸150cm、幅78cmの不整形な隅丸長方形を呈し、壁の深さ20cm～25cmを測る。床面は北にやや下降し、北小口には浅い溝がつくが、断面からは南小口にも浅い窪みが認められ、小口溝と見なすこともできる。

16）土壙墓－16（第26図）は土壙墓群の北西隅に他の土壙墓とはやや離れて位置しており、土壙長軸の方向もやや西に振っており異なる。土壙の平面形態は長軸232cm、幅81cmの隅丸長



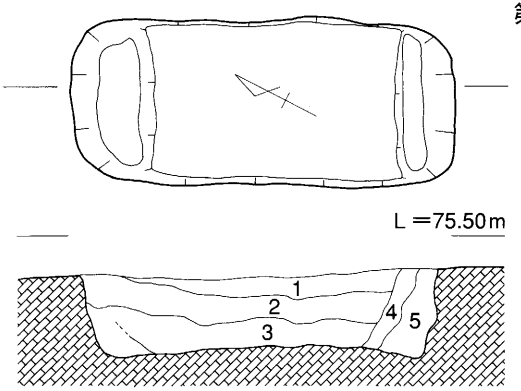
1　細かい淡黄灰色土

第21図　土壙墓－11平・断面図（S＝1/30）



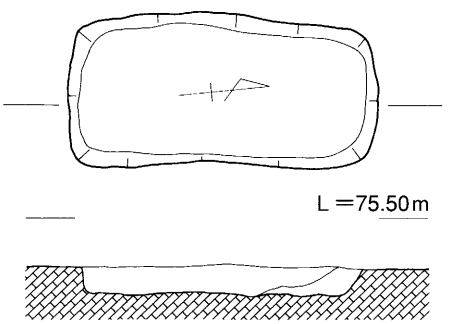
1　細かい淡黄灰色土
2　礫を含む淡黄灰色土

第22図　土壙墓－12平・断面図（S＝1/30）



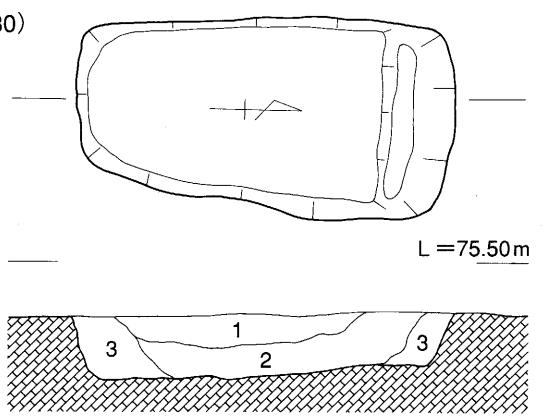
1　礫を多く含む淡黄色土
2　細かい淡黄灰色土
3　礫を含むが細かい淡黄灰色土
4　細かい淡黄灰色土
5　礫を多く含む明黄色土

第23図　土壙墓－13平・断面図（S＝1/30）



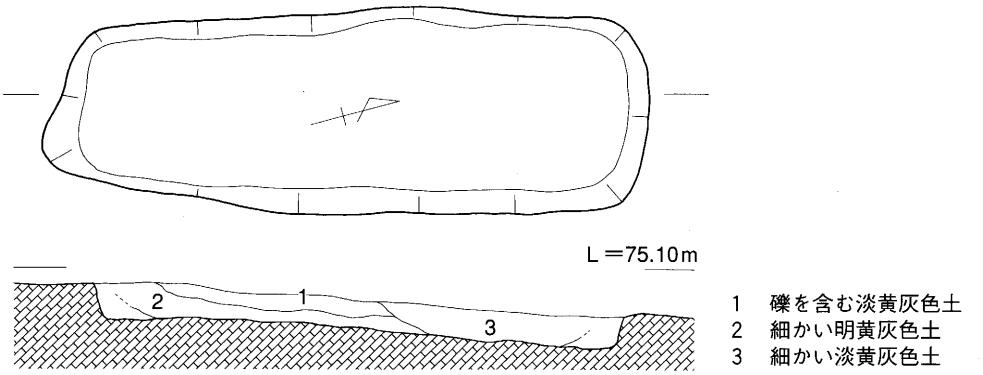
1　礫を含む細かい淡黄灰色土
2　細かい淡黄灰色土

第24図　土壙墓－14平･断面図（S＝1/30）

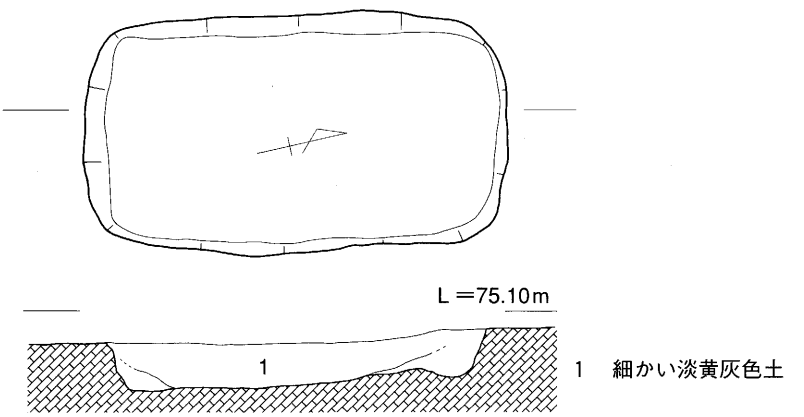


1　礫を含む淡黄灰色土
2　細かい淡黄灰色土
3　細かくしまった淡黄灰色土

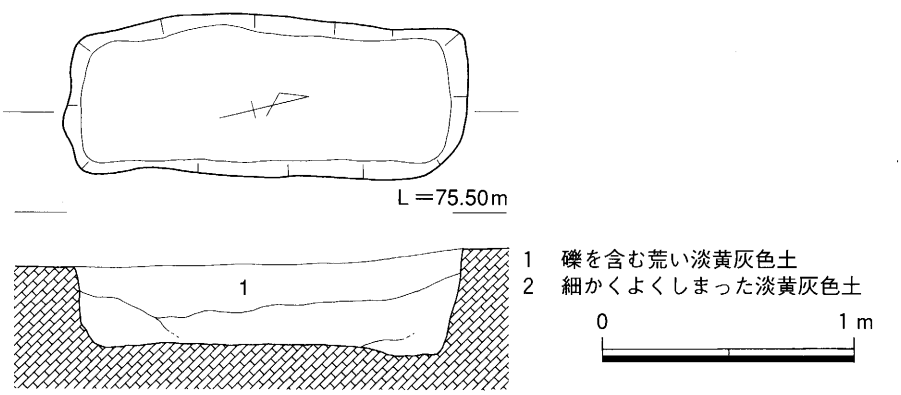
第25図　土壙墓－15平・断面図（S＝1/30）



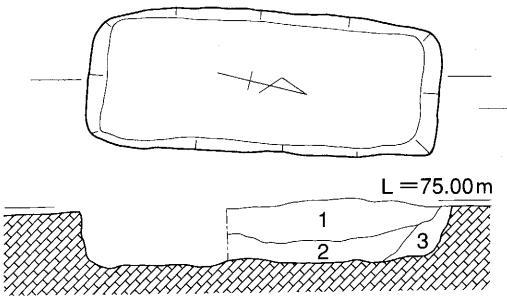
第26図　土壙墓－16平・断面図（S＝1/30）



第27図　土壙墓－17平・断面図（S＝1/30）

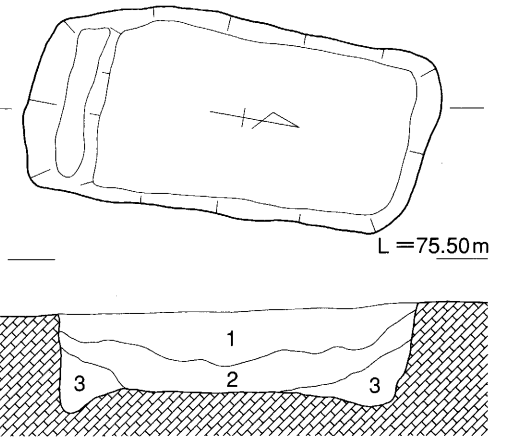


第28図　土壙墓－18平・断面図（S＝1/30）



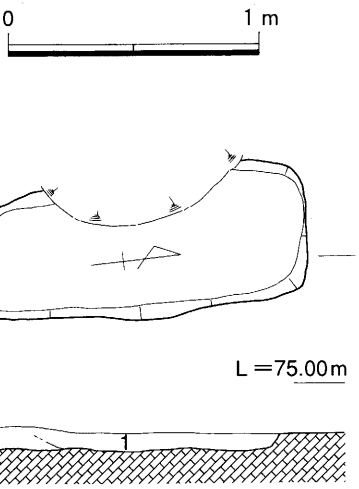
1　礫を含むやや荒い淡黄灰色土
2　細かい淡黄灰色土
3　細かくしまりのある淡黄灰色土

第29図　土壙墓－19平・断面図（S＝1/30）



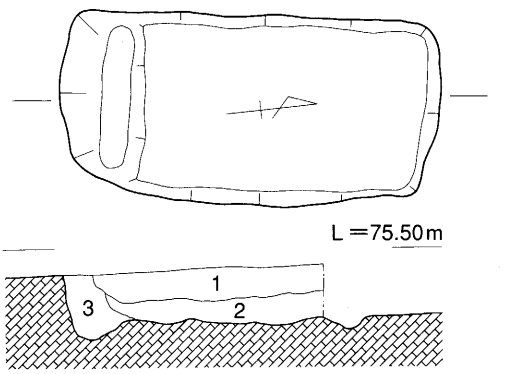
1　礫を含む淡黄灰色土
2　礫を含みよくしまった淡黄灰色土
3　細かく、よくしまった淡黄灰色土

第30図　土壙墓－20平・断面図（S＝1/30）



1　細かい淡黄灰色土

第31図　土壙墓－21平・断面図（S＝1/30）

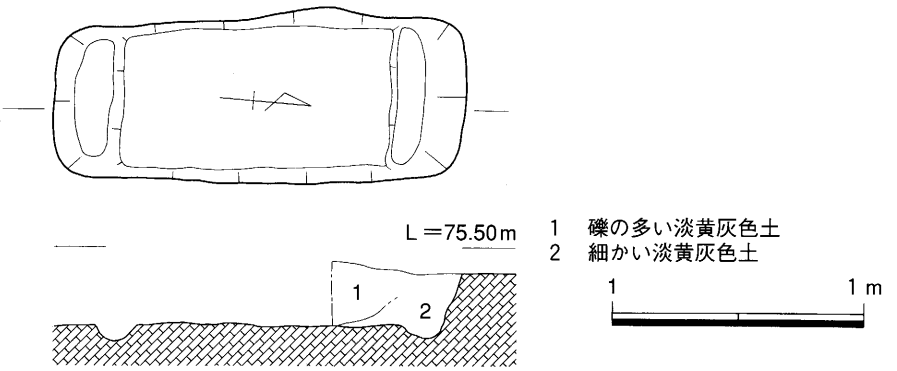


1　細かい礫を含む淡黄灰色土
2　細かく、しまりのある淡黄灰色土
3　細かく、よくしまった淡黄灰褐色土

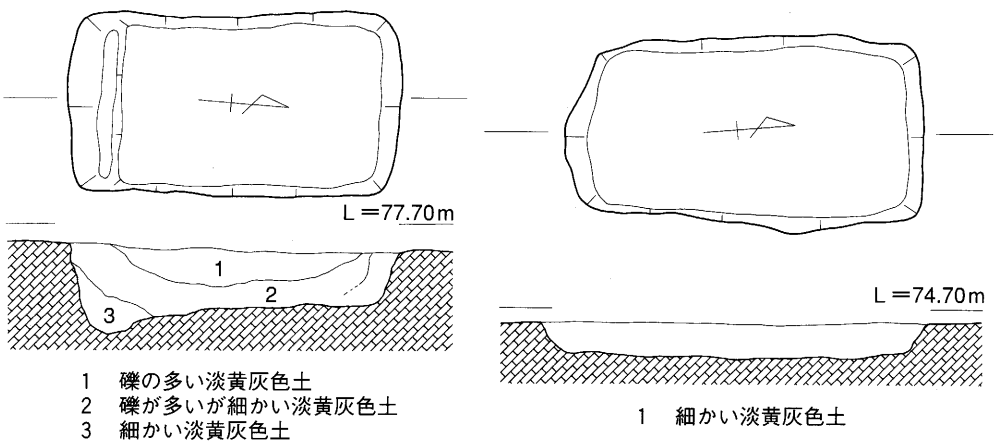
第32図　土壙墓－22平・断面図（S＝1/30）

方形を呈し、規模は本土壙墓群中最大である。遺存する壁の深さは10cm～15cmを測り、床面が地形に合わせて北西に下降するため残存状況はよくない。

17）土壙墓－17（第27図）は土壙墓群西端の緩斜面に１基のみ離れて位置しているが、墓壙の長軸方向は稜線上のものに揃えて掘られている。土壙の平面形態は長軸166cm、幅95cmの隅丸長方形を呈し長軸に対し幅が広い。土壙が立地する地点は西に下降する斜面のため残存状況は悪く、壁の深さ20cm～５cmが遺存するのみである。床面は南に若干傾斜して掘られており、



第33図　土壙墓－23平・断面図（S＝1/30）



第35図　土壙墓－25平・断面図（S＝1/30）　第34図　土壙墓－24平・断面図（S＝1/30）

断面で僅かに認められる両小口の窪みも、平面では明瞭な小口溝としては捉えられない。

18）土壙墓－18（第28図）は土壙墓群南端の尾根頂部に位置し、近接する土壙墓－2・7と墓壙の主軸を合わせて並列して掘られている。墓壙の平面形態は長軸158cm、幅64cmの不整形な隅丸長方形を呈し、残存する壁の深さは30cm～42cmを測る。墓壙の床面の両小口には、断面からは板材を据えるための浅い窪みが認められるが明瞭な溝とは言い難い。

19）土壙墓－19（第29図）は尾根稜線上の土壙墓群の北端に位置し、墓壙の主軸の方向は稜線上で列状に並ぶ一群とほぼ同じである。墓壙の平面形態は長軸140cm、幅55cmの比較的整った隅丸長方形を呈し、斜面が北に下降し始めるため残存する壁の深さは25cm程度である。墓壙の床面はほぼ水平で小口溝は認められない。

20）土壙墓－20（第30図）は尾根稜線上の土壙墓群の東端に位置し、土壙墓－14・15と主軸方向を揃えて南北に等間隔で並んでいる。墓壙の平面形態は長軸158cm、幅76cmのやや歪な隅丸長方形を呈し、壁高は深さ30cm～40cmが遺存している。ほぼ水平な床面の南小口には深さ10

cm程度の溝がつくが、断面からは北辺にも若干の窪みが認められ、両小口に溝を有するとみて差し支えない。

21）土壙墓－21（第31図）は土壙墓群に東端に位置し、下降し始めた斜面に掘られているため流失が激しく、木根による攪乱もあるため残存状況はよくない。墓壙の主軸方向は稜線上の墓壙群と同一であり、平面形態は長軸138cm、幅55cmのやや歪な隅丸長方形を呈し、壁高は深さ5cm～8cmが遺存するに過ぎない。

22）土壙墓－22（第32図）は稜線上の土壙墓群の北端近くに位置し、土壙墓－14・15・20とほぼ直線に並んでいるが、墓壙の主軸方向はややずれて東にとっている。墓壙の平面形態は長軸150cm、幅75cmの隅丸長方形を呈し、壁高は深さ22cm～26cmが遺存する。やや凹凸が顕著な床面の両小口には明瞭に溝が遺存しており、長軸の小口溝間の内法床面長は78cmを測る。

23）土壙墓－23（第33図）は稜線上の土壙墓群の北端近くに位置し、東隣の土壙墓－22とは掘形がほぼ接しているが、切り合い関係は認められない。墓壙の主軸は稜線上に南から並ぶ一群と同じ方位をとる。墓壙の平面形態は長軸163cm、幅70cmの隅丸長方形を呈し、壁高は深さ25cm程度が遺存している。墓壙の床面はほぼ水平で、両小口には溝がつき長軸の小口溝間の内法床面長は104cmである。

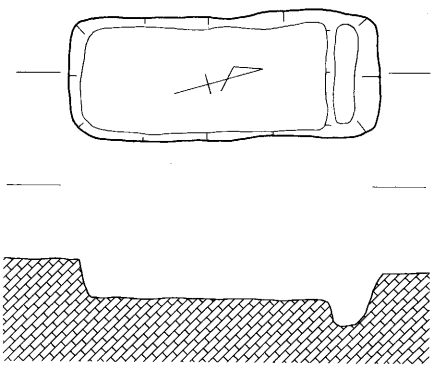
24）土壙墓－24（第34図）は稜線上の土壙墓群とはやや離れた北端の東に下降する斜面に位置し、南北に並ぶ土壙墓－25と同一の墓壙主軸方向をとっている。墓壙の平面形態は長軸141cm、幅75cmのやや不整形な隅丸長方形を呈する。本土壙墓は斜面が下降し始める地点に掘られているため流失が著しく、壁高は深さ15cm程度が遺存しているのみで谷側の壁はさらに低い。床面はほぼ水平であるが、小口溝は認められない。

25）土壙墓－25（第35図）は前述のように土壙墓－24と同一の主軸方向をとり、南北に並んでおり、墓壙の規模も近似した数値を示している。墓壙の平面形態は長軸133cm、幅72cmの隅丸長方形を呈している。墓壙の残存状況は土壙墓－24と同様の斜面にも係わらず比較的良好で、壁高は20cm～36cmが遺存している。床面は立地を考慮してか斜面の下降方向とは反対の南側に傾斜して掘られており、南小口には明瞭な溝を有する。

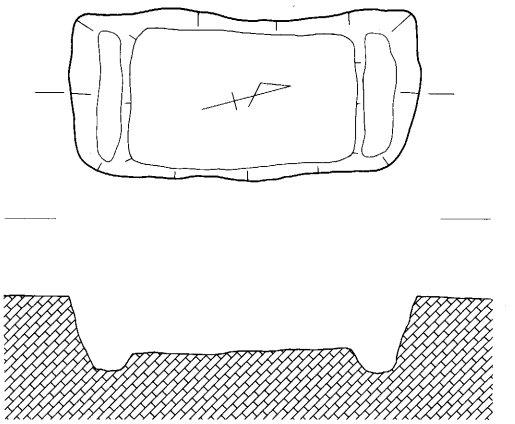
26）土壙墓－26（第36図）は尾根稜線から若干西に下がる緩斜面の等高線に平行して並ぶ土壙墓群の南端に位置し、土壙墓－27・32と同一の主軸方向をとり直線的に並んでいる。墓壙の規模は今回調査した土壙墓の中では最も小さく、長軸122cm、幅49cmの隅丸長方形を呈する。

床面はほぼ水平で、壁高は14cm～23cmが遺存しており北側の小口には明瞭な溝をもつ。

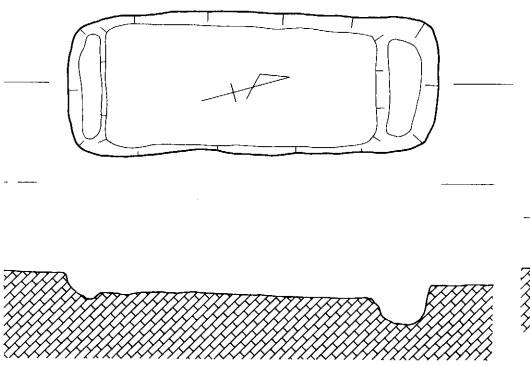
27）土壙墓－27（第37図）は土壙墓－26と同様に稜線西側の一群に含まれ、平行する土壙墓－32と掘形を接して掘られているが、切り合い関係は認められない。墓壙の平面形態は長軸137cm、幅65cmの比較的整った隅丸長方形を呈している。遺存する壁高は23cm～30cmを測り、



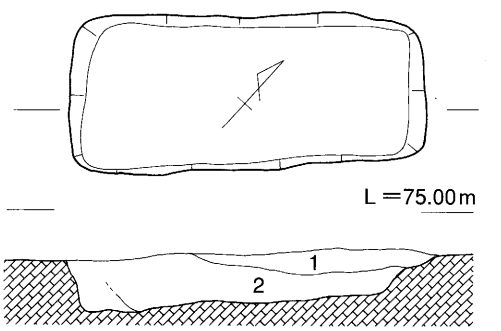
第36図　土壙墓－26平・断面図（S＝1/30）



第37図　土壙墓－27平・断面図（S＝1/30）

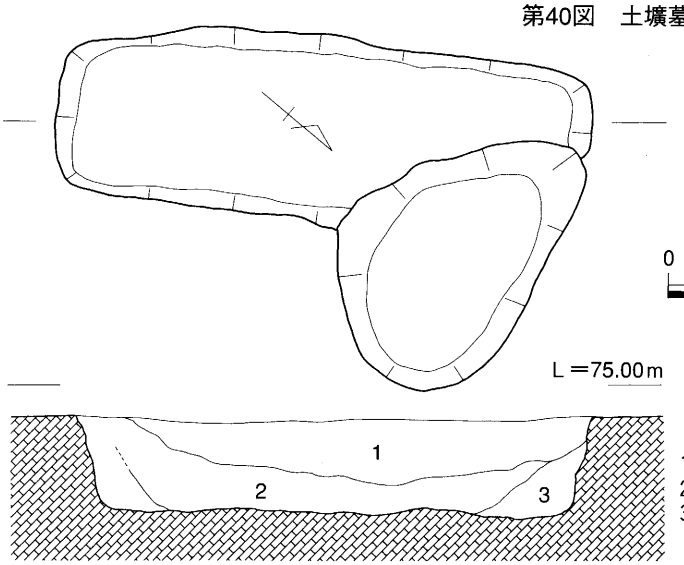


第38図　土壙墓－28平・断面図（S＝1/30）



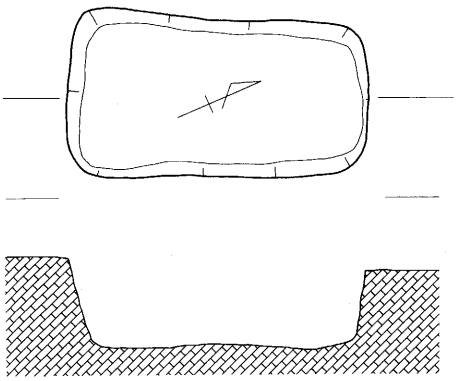
1　礫を含む淡黄灰色土
2　細かい淡黄灰色土

第40図　土壙墓－30平・断面図（S＝1/30）

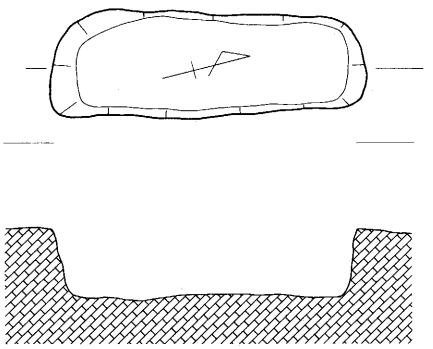


1　荒く礫を含む淡黄灰色土
2　礫を含むが細かい淡黄灰色土
3　細かくしまった淡黄灰色土

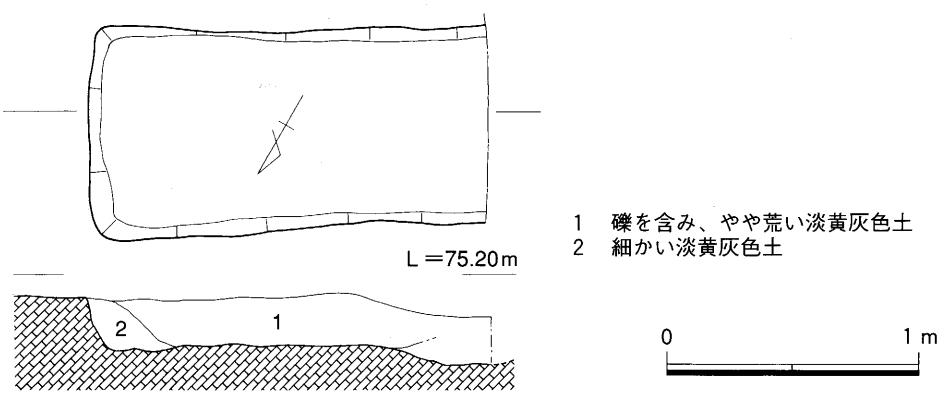
第39図　土壙墓－29平・断面図（S＝1/30）



第41図　土壙墓－31平・断面図（S＝1/30）



第42図　土壙墓－32平・断面図（S＝1/30）



第43図　土壙墓－33平・断面図（S＝1/30）

ほぼ水平な床面の両小口には明瞭な溝が掘られている。

28）土壙墓－28（第38図）は土壙墓－26・27と同一の主軸方向をとり直線的に並ぶ位置にある。墓壙の平面形態は長軸145cm、幅57cmの比較的整った隅丸長方形を呈しているが、残存状況は良くなく、壁高は5cm～15cmが遺存するのみである。墓壙の床面はほぼ水平であり、両小口には溝をもつが、斜面が下降する北側の溝の方が深く掘られている。

29）土壙墓－29（第39図）は土壙墓群の北東隅の緩斜面に位置している。墓壙の主軸方向は近接する土壙墓－24・25が、稜線上の土壙墓群と同様に等高線に平行しているのとは異なり、やや西にふった方向に掘られている。墓壙の平面形態は浅い土壙に切られているため正確には窺知し得ないが、計測可能な部分では長軸213cm、幅73cmを測り、本土壙墓群中では二番目の規模である。墓壙の残存状況は斜面に位置するにも係わらず良好で、壁高は40cm以上が遺存しており、断面から観察すすると、ほぼ水平の床面の小口付近が若干掘り窪められている状態が認められる。

30）土壙墓－30（第40図）は土壙墓群の北西隅にあたる稜線の先端部付近に位置し、墓壙の主軸方向は近接する土壙墓と同様に等高線にほぼ平行する方向をとっている。墓壙の平面形態は長軸140cm、幅62cmの隅丸長方形を呈しているが、斜面が下降し始める付近に立地するため残存状況は良くなく、壁高は20cm程度が遺存するのみである。床面は斜面の傾斜に影響されてやや北に傾いており、断面では小口溝を意識した僅かな窪みが認められる。

31）土壙墓－31（第41図）は稜線上の土壙墓群の最北端に位置し、南隣の土壙墓－12とは掘形が接する程の近距離で掘られており、同一の主軸方向をとり列状に並ぶ。墓壙の平面形態は長軸140cm、幅62cmの隅丸長方形を呈し、比較的規模は小さい。墓壙の残存状況は斜面に立地しているにも係わらず良好で、壁高は40cm以上が遺存している。床面は若干、斜面が下降する北側に傾いているが、断面からは小口溝はみとめられない。

32）土壙墓－32（第42図）は尾根稜線からやや西側に下がった緩斜面に並ぶ一群中に位置し、土壙墓－27と墓壙の掘形を接して平行に掘られている。墓壙の平面形態は長軸125cm、幅43cmの長楕円形に近い不整な隅丸長方形を呈し、比較的規模は小さい方である。墓壙の残存状態は、縦列する土壙墓－26に較べると深く掘られているため良好であり、壁高は30cm程度が遺存している。墓壙の床面はほぼ水平であるが、断面からも小口溝は認められない。

33）土壙墓－33（第43図）は土壙墓群の南西隅にあたる西に下降する緩斜面に位置し、一基のみが遊離したような印象を受ける配置である。墓壙の主軸方向は等高線に平行しておらず、斜めに横切るかたちで掘られている。平面形態は斜面が下降する西辺が流失しているため正確には窺知し得ないが、長軸160cm以上、幅78cmの比較的整った隅丸長方形を呈している。墓壙の床面は残存する部分ではほぼ水平で、壁高20cm程度が遺存しており、断面からは東辺の小口に僅かな窪みが認められる。

以上が東蚊蜂遺跡第一地点で調査を実施した遺構の概要である。

先ず、今回の調査で明らかになった遺構の時期については、調査を実施した遺構の中で遺物を共伴していたのはSH01のみで、床面上から出土した土器から弥生後期初頭と考えられる。

他の土壙・土壙墓については、共伴する遺物を伴わないため具体的な時期を特定することは不可能であり、覆土と遺構配置で推定するしかない。

この場合、前述のようにSK01～03は住居に先行する時期と考えられるが、土壙墓群との関係でみると、南端に位置する土壙墓－８が、SK03を避けるかのように不自然な主軸方向をとっていることがわかる。

この点をSK03が未だ開口していた段階に土壙墓が掘られたことによると考えると、同様にSK02付近に土壙墓が存在せず、あたかも意識的に避けたような配置をとることとも時期的に矛盾は無いと思われる。

このように、土壙が地上に意識できる状態を保っている段階に土壙墓が掘られたとすると遺構の年代は、土壙→土壙墓→住居の順が考えられ、土壙・土壙墓についてはほぼ同時期に存在しており、一応、弥生後期以前の所産とみることが妥当である。

次に土壙墓群に特色について若干ふれてみる。

今回、調査を実施した土壙墓群の所在する尾根稜線上から斜面にかけては詳細に精査したにも係わらず、区画溝等の地形を改変した痕跡は認められなかった。

また、土壙墓の残存状況を考慮すれば大規模な表土の流失や、後世の地形の改変も想定し難く、墳丘等の盛土、区画溝は当初より存在しなかった可能性が高い。

この点については土壙墓群の平面的な位置関係からも推定が可能であり、その配置は基本的には尾根の稜線に土壙の主軸を平行させて列状に続くもので、やはり土壙墓間を区画したような纏まりの「群」を認めることはできない。

各土壙墓の構造と規模も、その差異により明確に「群」を構成できるような傾向はみられない。敢えて指摘するならば稜線頂部上に2～3列で比較的、等間隔・同一方向の規則性を有して並ぶものを一群と捉えると、土壙の規模が大きく、小口溝が掘られたものがやや多い傾向が窺われる程度であるが、この一群の配置関係も周辺の土壙墓と明確に隔絶するものではない。

各々の土壙墓の構造については前述したが、大半が小口溝が掘られたもの、若しくは小口が若干低くなるものであることから、組み合わせ式の木棺が用いられたとみられる。

また、土壙の床面には痕跡を留めないものも、土層では小口に空間が存在したことを示す細かい流入土が観察され、やはり組み合わせ式の木棺が用いられたと考えることが妥当である。

ただ、その場合、大半の土壙の内法長が140cm以下であり、さらに小口溝の内法間は短いことから到底、成人の埋葬が可能とは考えられず、幼児の埋葬が主であったとすることも不自然であり、土壙墓－10で体に射ち込まれたであろう石鏃が残存するため再埋葬とも考え難い。

この墓壙の規模を、県内で近い時期の前山遺跡、四辻土壙墓遺跡、みそのお遺跡の調査例と比較すると、これらの遺跡では明らかに成人の埋葬土壙は、最低でも長さ150cmを超える規模である。ただ、これらの遺跡では埋葬主体の他にも供献土器・区画溝等の要素も当遺跡とは異なっており、この違いが若干の時期・地域性の相違を示すものか、造墓集団の意識・経済力の格差、埋葬方法の差異を表すものなのかは断定できない。

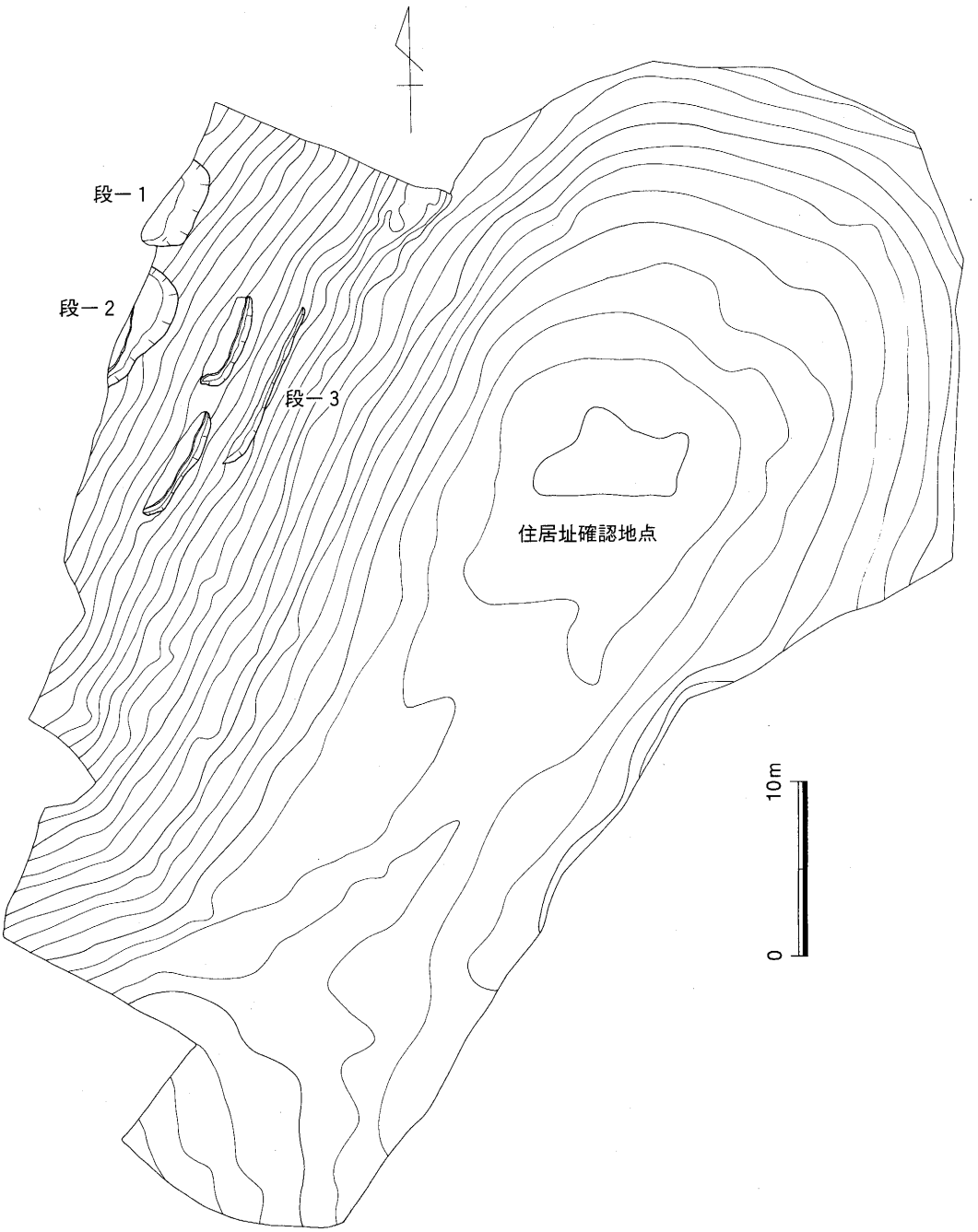
敢えて言うならば、墓壙を小型にすることは板材・労力の節約に繋がり、墓壙の在り方と供献品が皆無である点と合わせて、階層差を明示する要素は全くみられない。

また、土壙墓間に切り合い関係がみられないことから、地上に何らかの痕跡を留める期間内に連綿と埋葬が続けられたと考えられ、周辺遺跡について不明な現時点では、眼下に点在したであろう小規模な集落の共同墓地的な性格を指摘するに留めておく。（武田）

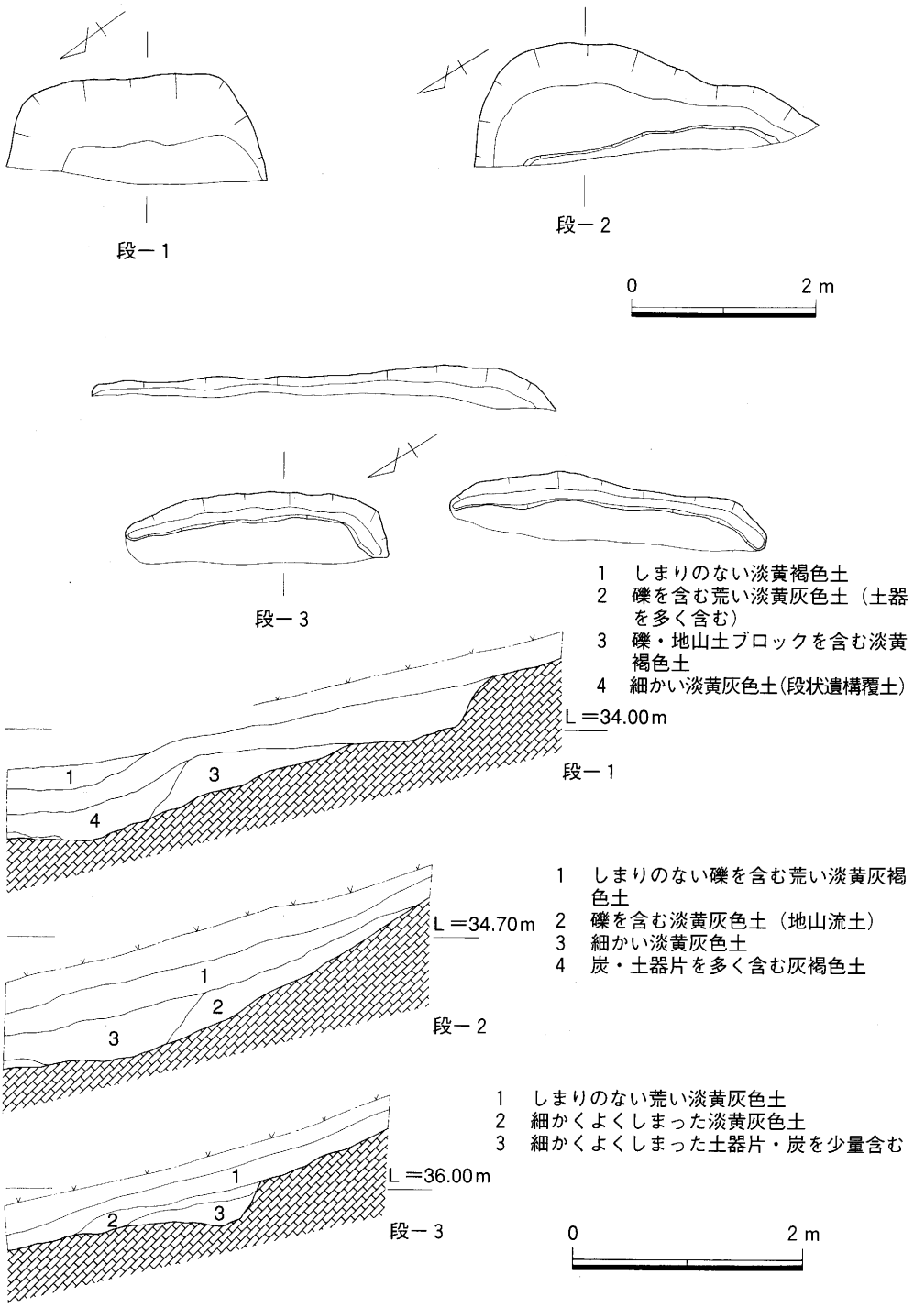
土壙墓計測表

蚊蜂遺跡

番号	平面形	掘方上面(cm)		床面プラン(cm)		尾根筋と	深さ(cm)	床面施設	備考
		長さ	幅	長さ	幅				
1	長方形	160	70	132	51	平行	40		
2	隅丸長方形	160	70	149	58	平行	18～25		
3	隅丸長方形	200	90	174	48	平行	26～40		
4	隅丸長方形	135	66	116	52	平行	14～22		
5	隅丸長方形	195	60	162	50	平行	10～15	南小口に礫	
6	隅丸長方形	160	83	138	62	平行	15～30		
7	隅丸長方形	127	52	116	46	平行	15		
8	長楕円形	125	63	120	56	直交	10		
9	長方形	135	75	122	64	平行	18～40		
10	隅丸長方形	143	53	128	46	平行	12～15		
11	長楕円形	145	47	86	38	平行	15		
12	隅丸長方形	125	65	114	52	平行	13～25		
13	隅丸長方形	153	65	128	58	平行	28～45		
14	隅丸長方形	122	58	112	50	平行	10		
15	隅丸長方形	150	78	128	66	平行	20～25		
16	隅丸長方形	232	81	216	66	平行	10～15		
17	隅丸長方形	166	95	152	82	平行	5～20		
18	隅丸長方形	158	64	144	52	平行	30～42		
19	隅丸長方形	140	55	124	46	平行	25		
20	隅丸長方形	158	76	138	54	平行	30～40		
21	隅丸長方形	138	55	132	46	平行	5～8		
22	隅丸長方形	150	75	128	62	平行	22～26		
23	隅丸長方形	163	70	136	56	平行	25		
24	隅丸長方形	141	75	126	66	平行	15		
25	隅丸長方形	133	72	110	62	平行	20～36		
26	隅丸長方形	122	49	108	40	平行	14～23		
27	隅丸長方形	137	65	116	54	平行	23～30		
28	隅丸長方形	145	57	134	46	平行	5～15		
29	隅丸長方形	213	73	144	60	平行	40		
30	隅丸長方形	140	62	128	54	直交	20		
31	隅丸長方形	140	62	112	52	平行	40		
32	隅丸長方形	125	43	106	36	平行	30		
33	隅丸長方形	160＋	78	154＋	74	直交	20		



第44図　東蚊蜂第二地点遺構配置図（S＝1/300）



第45図　段状遺構平・断面図（S＝1/60）

第３節　東蚊蜂遺跡第二地点

東蚊蜂遺跡第二地点は、第一地点が所在する急峻な尾根から北に派生し末政川に臨む、緩やかで比較的頂部が平坦な丘陵上に位置しており、両地点の比高差は約20mある。

この丘陵上では、確認調査時に緑地保存予定の平坦な頂部付近で、弥生期の竪穴住居址２軒が検出された他、西側の斜面でやはり弥生期の段状遺構が確認された。

このため、調整池の掘削の対象となった斜面部についてのみ発掘調査を実施し、緑地部分の住居址については埋め戻して現状保存とすることとなった。

段状遺構が所在する西向き斜面は、浸食が進んだ裾部は急傾斜であるが、遺構が所在する中程以上は比較的緩やかである。この裾部にまで遺構が広がっていたか否かは、調査時点では確認することは出来なかったが、現地形を観る限り遺構が存在した可能性は低い。

発掘調査は重機を用いて表土を除去した後に、堆積土が厚いことが予想されたため、人力で斜面の等高線に直交するトレンチを掘り下げ、断面で遺構を確認した。

確認できた段状遺構は５か所で、いずれも等高線に平行して掘られているが、段－１以外では盛土部分が流失し、遺存するのは地山に堀り込まれた部分のみである。

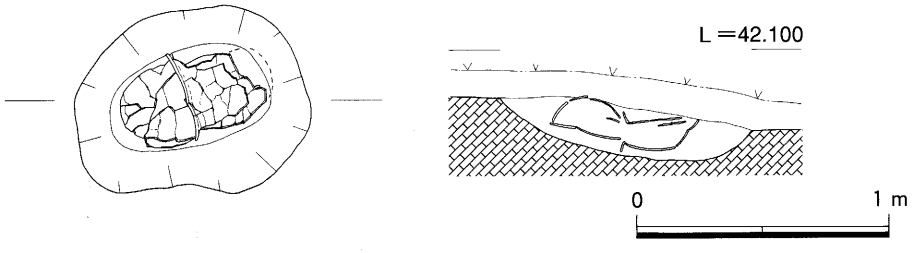
段－１では埋め出した盛土が良好に遺存しており、床面幅は最大で240cmを測る。

段－１・２では床面上に土器片と炭が散布しており、床面上で柱穴は検出できなかったが、ある程度の生活空間として利用されていたことは確実と思われる。

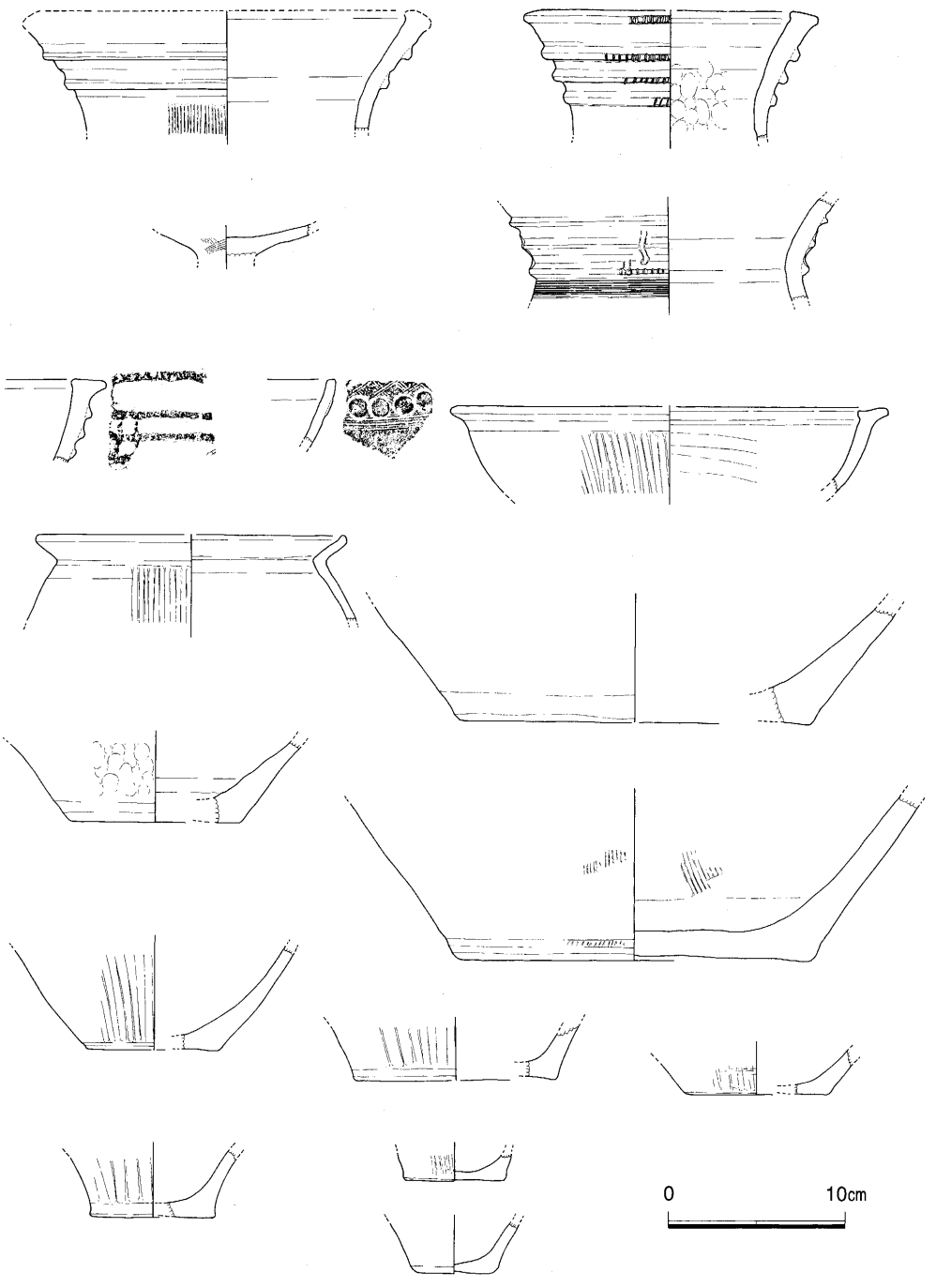
段状遺構から出土した土器（第48図）は大半が覆土中からのものであり、上方の他の遺構から流れ落ちたとみられる状態で出土した。しかし、床面上から出土した土器と時期的に差異はなく、一帯の遺構は全て弥生中期後半を中心とする同時期に存在したとみられる。

この他に調査区の南端の西向き斜面で、平安時代の土器棺墓一基が検出された。

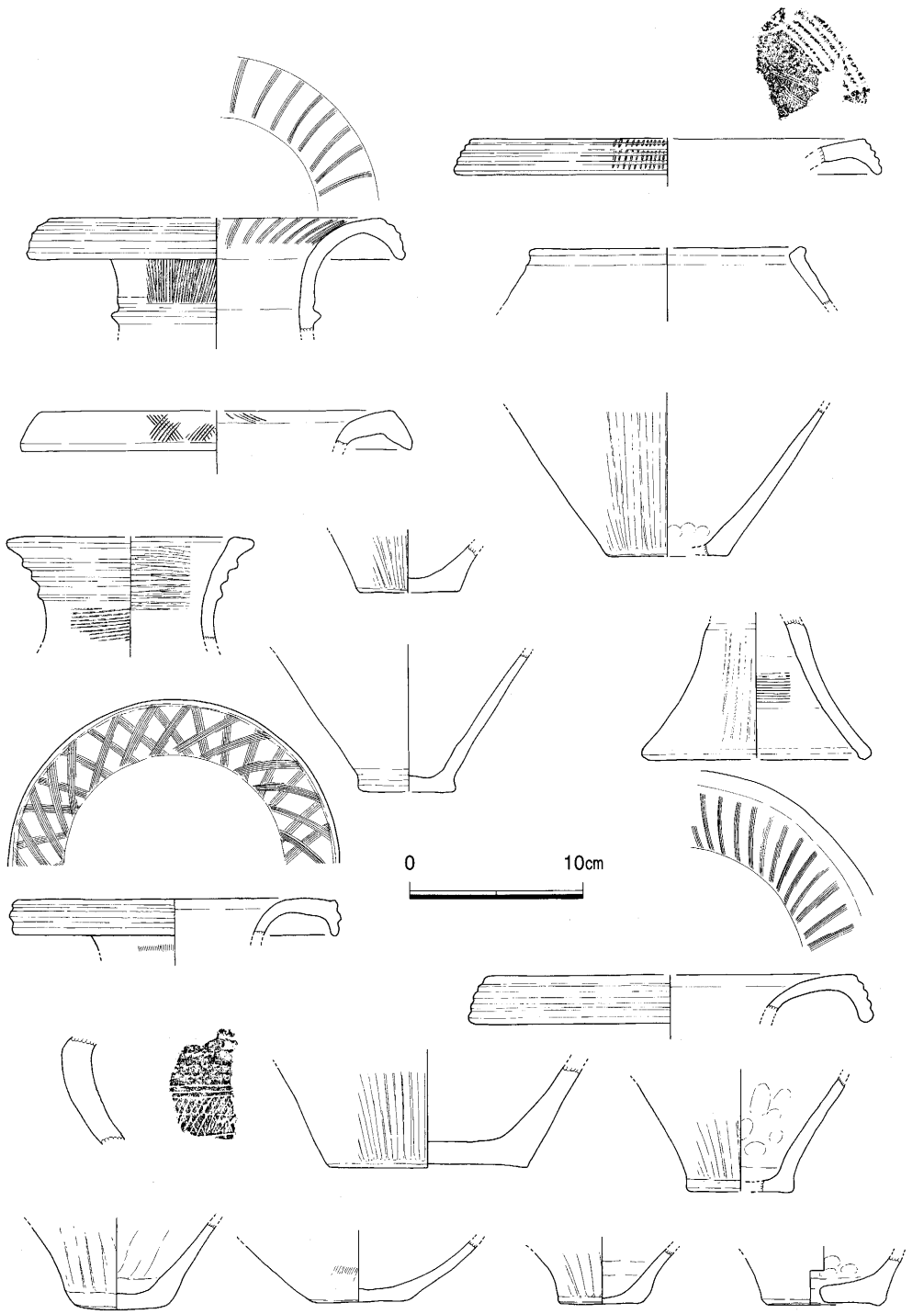
土器棺は二個体の土師器の甕の口を合わせて、92cm×70cmの土壙に埋められており、主軸をほぼ南北にとり、南側の甕の口縁部を打ち欠き片側にはめ込んだ状態であった。土器棺墓は甕の特徴から10世紀の所産であり、小児若しくは火葬骨を埋葬したものとみられる。　（武田）



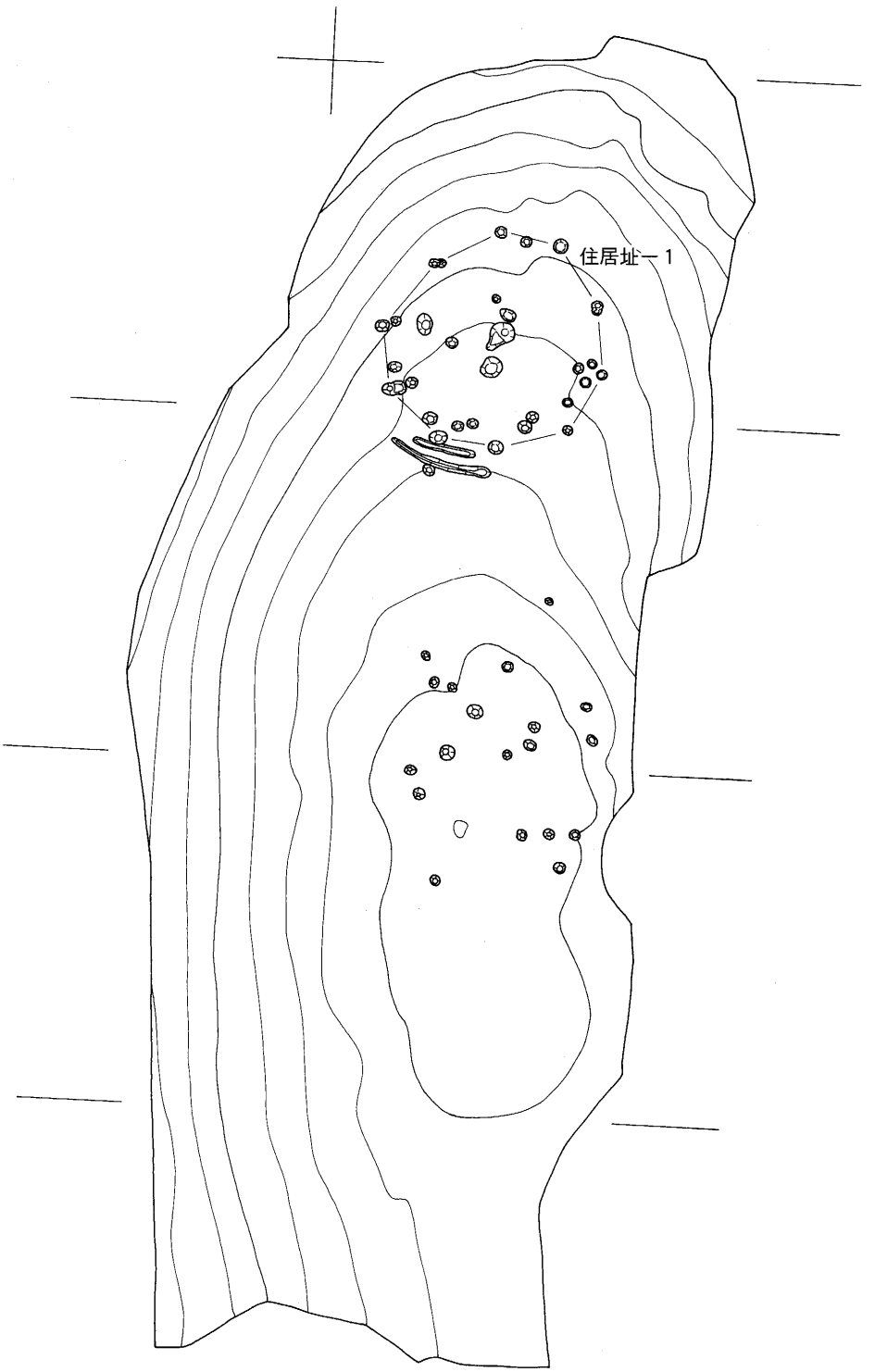
第46図　土器棺墓平・断面図（Ｓ＝1/30）



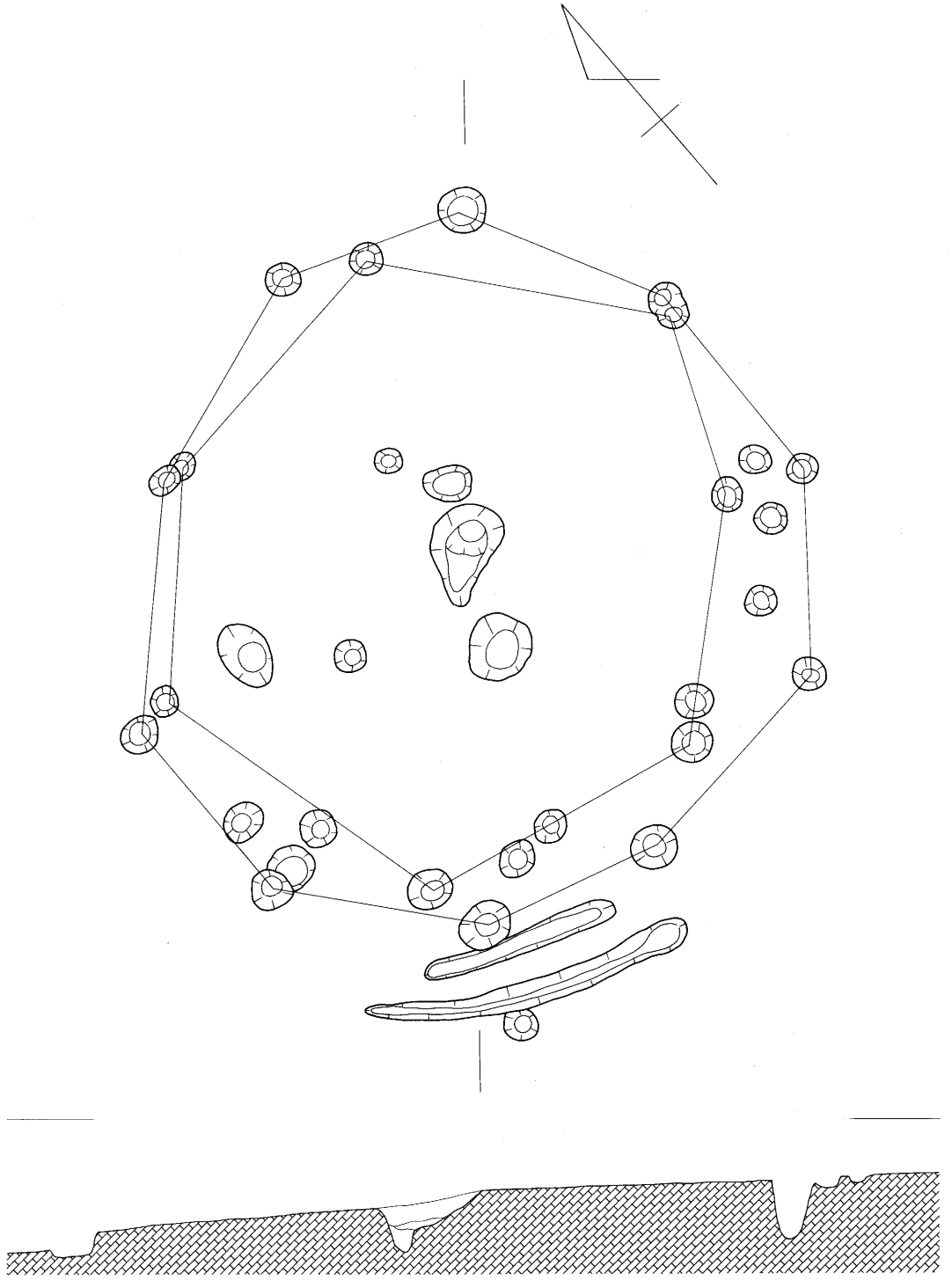
第47図　東蚊蜂遺跡第二地点段状遺構出土遺物（S＝1/4）



第48図　東蚊蜂遺跡第一地点土壙出土遺物（S＝1/4）



第49図　西蚊蜂遺跡遺構配置図（S＝1/300）



第50図　西蚊蜂遺跡　住居址－１　平・断面図（Ｓ＝1/60）

第Ⅳ章　西蚊蜂遺跡

1．調査の概要

西蚊蜂遺跡は、東蚊蜂遺跡第二地点から浅い谷を挟んで西側に位置し、北に派生する標高50m前後の低い丘陵上に所在する。

遺跡が所在する低い丘陵の頂部は、浸食の進んだ裾部に較べて非常に平坦であり、東蚊蜂遺跡第二地点と類似した景観を呈する。しかし、遺構が堀り込まれた地山は、近接する東蚊蜂遺跡の山砂利礫層とは異なり赤橙色の花崗岩風化粘質土である。

遺跡の調査は、確認調査で遺構の存在が明らかになった部分を重機で表土を除去した後に、人力で遺構の検出を行い、住居址１軒と柱穴多数を確認した。

住居址（第50図）は丘陵頂部から若干下降した緩斜面に位置しているため、流失が激しく遺存状態は悪い。そのため、平面的な輪郭は殆ど不明であり、僅かに残る壁体溝と中央穴の存在で辛うじて住居と判断できた。

また、僅かに残る住居址の壁体溝は二重である点から、建て替えによる拡張が想定され、床面上で検出された柱穴についても建て替えに留意してその配置を推定した。

この結果、柱穴の規模と間隔で10本～７本の主柱穴の配置を想定したが、住居の規模を直径８m前後と考えれば、他の調査例と比べるとやや多く、不確定と言わざるを得ない。

住居址に伴う遺物は少量のサヌカイト片以外に出土せず、明確な時期決定はできなかった。

また、調査区内で検出された他の柱穴についても、埋土からみると住居址と同時期である可能性が高いが、住居・建物としてまとまるものはなく、遺物の出土もないため時期・性格は不明である。

以上が西蚊蜂遺跡の調査概要であるが、本遺跡の調査着手時には丘陵裾部では、すでに掘削に着工しており、同様の地形を呈する東蚊蜂遺跡第二地点にみられた段状遺構については、その存在を確認することはできなかった。

この点については、本遺跡のような立地では、竪穴住居と段状遺構がセットで集落を構成する場合が多いことから、存在した可能性は高いと考えている。

第Ⅴ章　結語

以上が今回の開発に伴う蚊蜂遺跡の調査の概要であるが、本遺跡の調査は工事中発見によるもののため、調査着手時には対象地全体で掘削が進行しており、遺構の確認調査を実施した範囲は限定的なものにとどまらざるを得なかった。

このため、4.1ｈの工事対象地のなかで発掘調査を実施した範囲は非常に僅かであり、今回の調査結果のみで遺跡全体について触れることには、やや困難がある。

本稿ではこの点を踏まえて、調査を行った遺構の事実報告に重点を置き、若干の考察を加えてまとめとしたい。

先ず、東蚊蜂遺跡第一地点で多数が確認された土壙墓についてみてみたい。

東蚊蜂遺跡第一地点の尾根上で、密集して確認された土壙墓は33基にのぼり、その在り方は基本的には尾根の稜線を中心にして等高線に土壙の主軸を平行させて掘られている。

この形態は多少の主軸方向の相違はみられるものの、ほぼ共通しており、地形を勘案すれば当然のことのようであるが、切り合い関係がみられない点と併せて同一の集団の墓域として、ある程度の規則性が存在したとも考えられる。

また、土壙墓の規模・構造と立地の関係では、小口溝が掘られて比較的整った平面形のものが尾根の稜線頂部にやや多い傾向が認められるが、規則的ではなく、むしろ例外が多い。

この点については、盛土や列石・区画溝等を確認できなかったこともあり、土壙墓群内の序列や埋葬順序を推定することまでは残念ながらできなかった。

次に土壙墓の構造の特色を他の遺跡の調査例と比較すると、弥生後期初頭から営まれた土壙墓が多数調査された御津町みそのお遺跡、山手村前山遺跡では小口溝が掘られたものが古く、溝のないものに移行する傾向が指摘されている。

しかしながら当遺跡の場合には両者が混在しており、過渡期を想定するような偏りもみられないのが特徴である。土壙墓群の時期については遺物が石鏃１点のみのため、近接する住居址との関係で弥生後期以前と推測したが、上記の土壙墓の構造と在り方を参考にしても、それ以上の時期的な限定は不可能と言わざるを得ず、当地域での調査例の増加を待ちたい。

東蚊蜂遺跡第一地点で単独で確認された住居址については、弥生後期初頭であることと、退去に際しての放火、立地、拡張がない点等は、北隣の水系の総社市新本地区で調査された有安遺跡の調査例に類似している。同様の調査例は弥生中期から後期前半の総社平野に接する丘陵部に多数存在しており、段丘上や沖積地に弥生後期の集落が爆発的に増加する直前の共通した様相と考えられる。

これに対して、本遺跡の低丘陵上で確認された、弥生中期の住居と段状遺構で構成される集落は新本川流域では少なく、集落が本格的に形成されるのは後期初頭である。

今回の調査結果から、末政川の対岸の南向き緩斜面に中心集落が存在すると仮定すると、地形からみて弥生中期段階では、当地域一帯が高梁川以西では有数の遺跡となる。また、土壙墓群についても立坂弥生墳丘墓へ続く母体集団の墓域の一部とみることもでき、さらに他の尾根上にも存在する可能性が十分考えられよう。（武田）

付　載

調査に至る経緯、また調査の成果についてはすでに述べられたとおりだが、もう一度簡単にまとめると、次のとおりである。

工業団地造成が開始された平成９年度には、真備町には専門職員を配置しておらず、また計画地内に周知の遺跡が認められなかったこともあり、確認調査を行うことなく造成工事が開始された。

その後調査が必要となったため、県教育庁文化課と真備町の間で繰り返し協議を行い、岡山県古代吉備文化財センターから職員の派遣を仰ぎ、急きょ試掘調査を行った。

この結果、北向きに派生した３か所の尾根に東蚊蜂第１遺跡、東蚊蜂第２遺跡、西蚊蜂遺跡が確認され、保存が困難となった東蚊蜂第１遺跡、西蚊蜂遺跡については記録保存の措置をとることとなった。

調査終了時の平成９年９月27日には、現地説明会が行われ、130名以上の見学者が訪れるなど、町民の文化財に対する関心の高さが認識される結果となった。

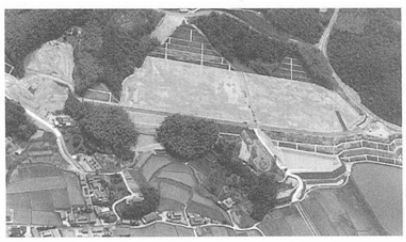
この蚊蜂遺跡の調査では、県教育庁文化課の指導と、岡山県古代吉備文化財センター、総社市教育委員会の協力によって速やかに対応が行われ、短期間のうちに調査を終了することができた。しかし、今後、適切に文化財行政を進めていくためには、専門職員が不可欠であると認識が高まり、これを契機に職員が採用される運びとなったのである。

東蚊蜂第２遺跡が確認された地点については、計画の当初から公園として整備されることになっていたが、トレンチ調査では住居跡などが確認されており、さらに調査範囲を広げれば、この尾根全体に遺跡が存在する可能性が予見された。

調査結果を受けて町と教育委員会とで協議を行い、丘陵の地形を生かした形で整備することとした。

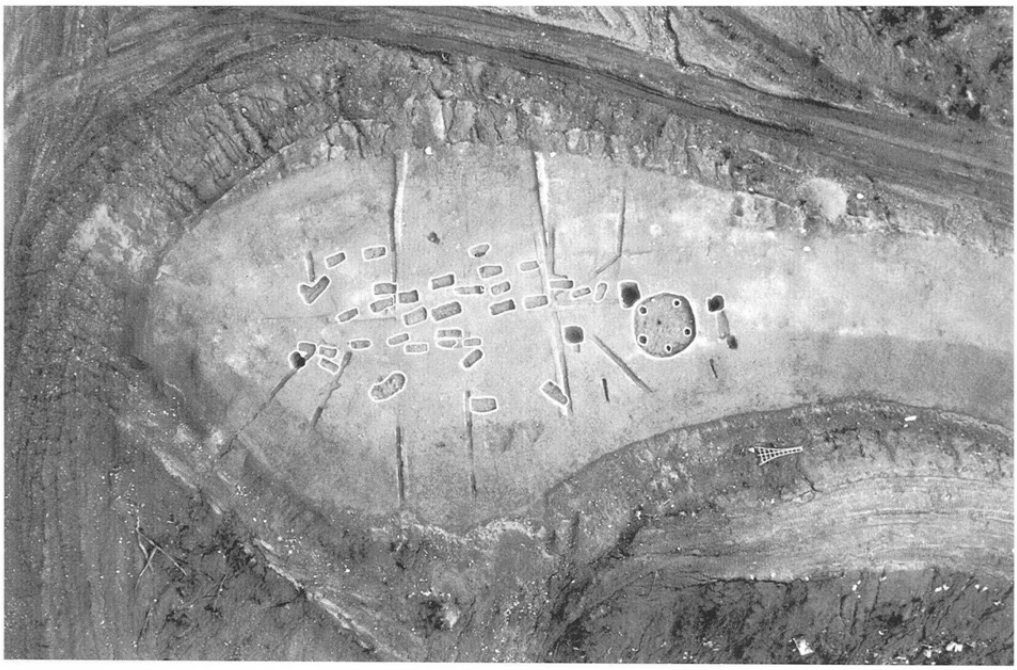
設計変更に際しては、遺跡公園として竪穴住居を復元するという案もあったが、遺構に影響のない形で、取付道路と排水路の位置を変更したうえで、休憩施設と遺跡の説明板を設置することに決定した。休息施設の設置については、構造上地面を１ｍほど掘下げ、支柱を埋め込む作業が必要であったため、設置場所については調査員立会のもと遺構を破壊しない位置に建てられた。

休憩施設の設置、看板の執筆内容については総社市教育委員会に御指導をいただき、平成10年３月に完成した。　（藤原）

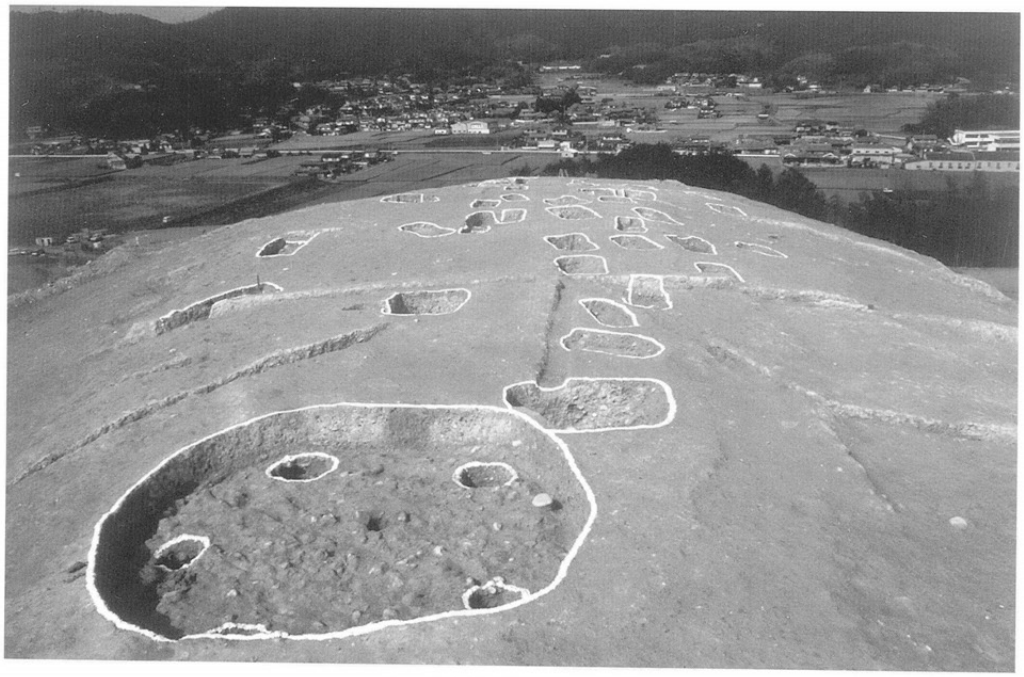


完成した市場工業団地

休憩施設と説明板



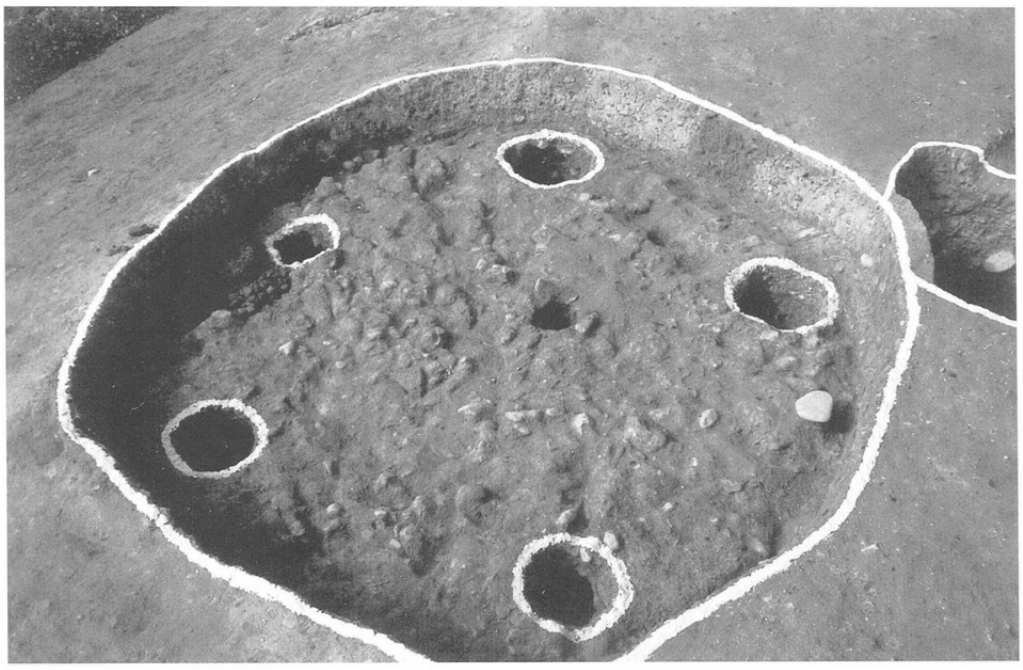
1．東蚊蜂遺跡第一地点全景



2．東蚊蜂遺跡第一地点

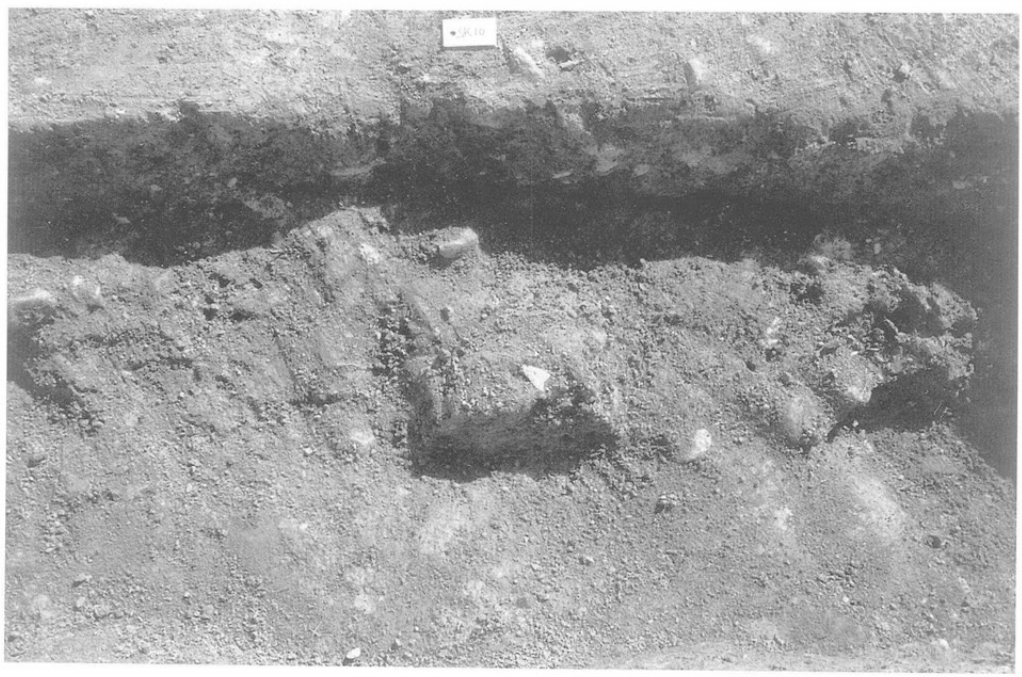
図版 2

3．東蚊蜂遺跡第一地点　住居址－１炭化材出土状況



4．東蚊蜂遺跡第一地点　住居址－１掘り上がり

5．東蚊蜂遺跡第一地点　土壙一 1



6．東蚊蜂遺跡第一地点　土壙墓一10石鏃出土状況

図版 4

7．東蚊蜂遺跡第一点　土壙墓－6

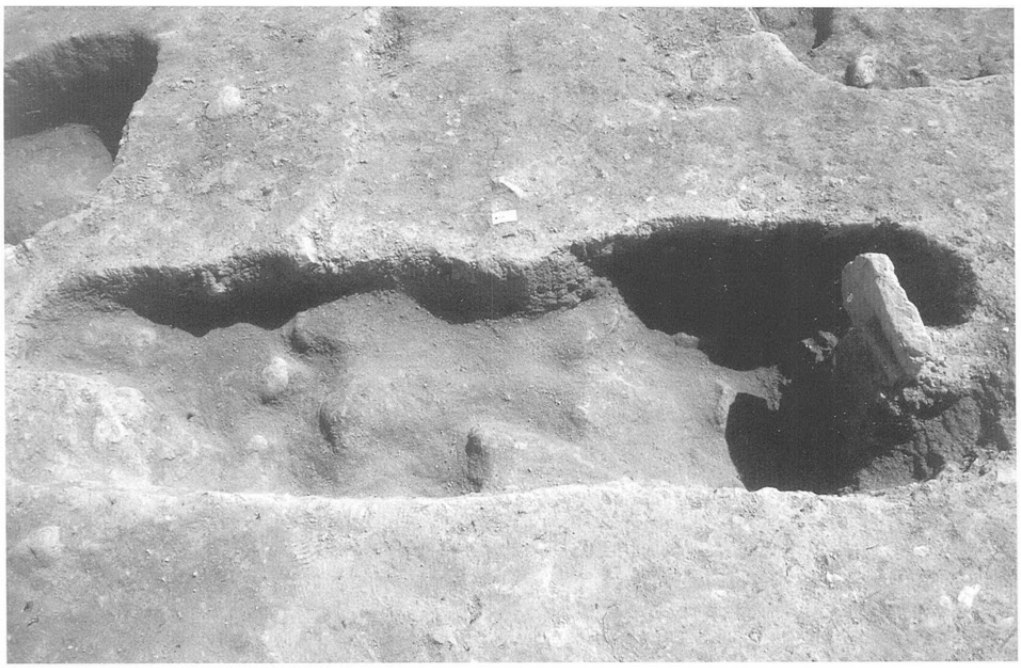
8．東蚊蜂遺跡第一地点　土壙墓－9

9．東蚊蜂遺跡第一地点　土壙墓－20

10．東蚊蜂遺跡第一地点　土壙墓－25

図版 6

11．東蚊蜂遺跡第一地点　土壙墓－ 4



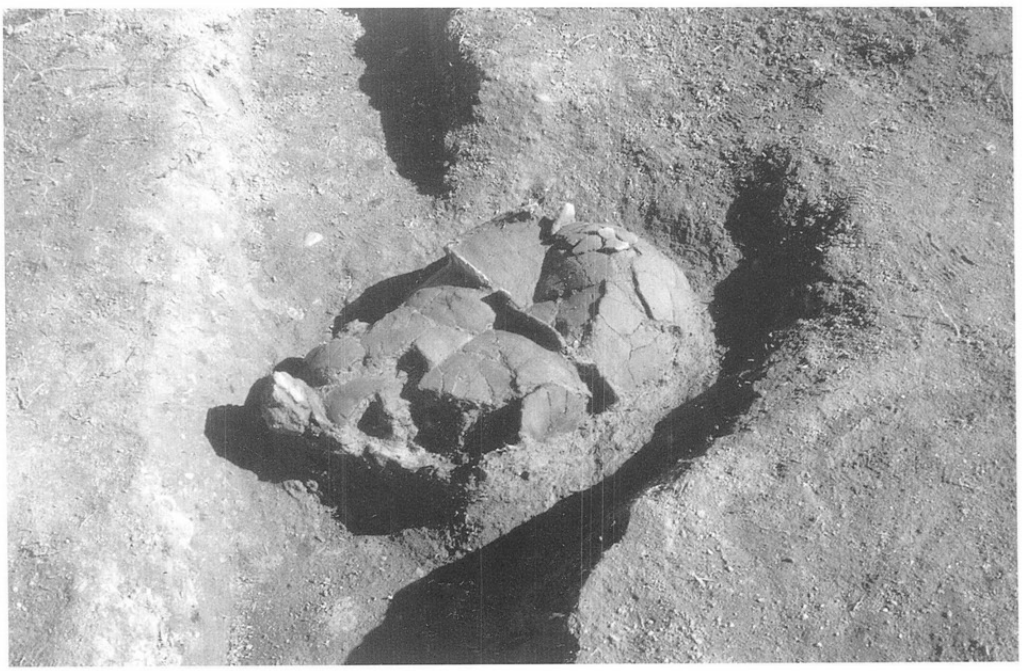
12．東蚊蜂遺跡第一地点　土壙墓－ 5

13．東蚊蜂遺跡第一地点　土壙墓－6

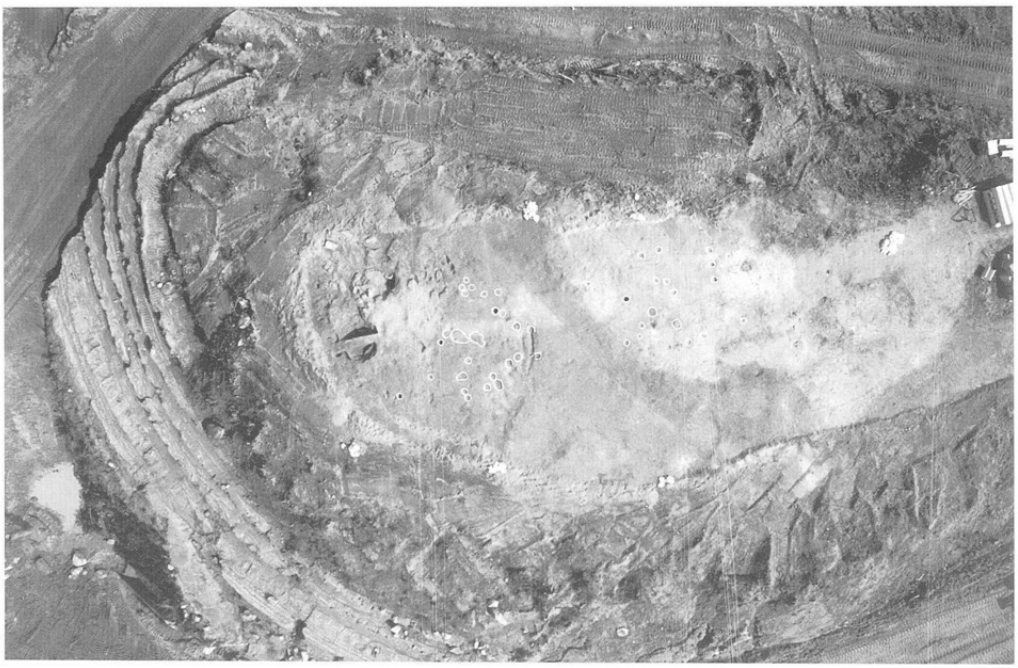
14．東蚊蜂遺跡第二地点遠景（西から）

図版 8

15. 東蚊蜂遺跡第二地点段状遺構（西から）



16. 東蚊蜂遺跡第二地点土器棺墓出土状況



17．西蚊蜂遺跡全景

18．西蚊蜂遺跡住居址－1調査風景（南から）

報告書抄録

ふりがな	かばちいせき
書名	蚊蜂遺跡
シリーズ名	真備町埋蔵文化財発掘調査報告
シリーズ番号	1
編著者名	平井　勝・武田泰彰・藤原憲芳
編集発行機関	岡山県吉備郡真備町教育委員会
所在地	〒710-1301　岡山県吉備郡真備町大字箭田1685　TEL 0866-98-0042
発行年月日	西暦1998年3月30日

ふりがな 収集遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
東蚊蜂遺跡 西蚊蜂遺跡	岡山県吉備郡 真備町大字市場 字竹ノ内	503		34度 36分 50秒	133度 44分 58秒	19970806 ～19970808 19970908 ～19971008	670㎡ 3650㎡ 510㎡	真備町市場工業団地造成伴う確認調査及び本発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
東蚊蜂遺跡 西蚊蜂遺跡			竪穴住居　1軒 土壙墓　33基 貯蔵穴　1基 段状遺構　5ケ所 竪穴住居　1軒	弥生土器 石鏃	北にむかって派生する尾根上に存在する土壙墓群を中心とする遺跡

真備町埋蔵文化財発掘調査報告 1

蚊 蜂 遺 跡

1999年3月　印刷
1999年3月　発行

編集発行　岡山県真備町教育委員会
岡山県吉備郡真備町大字箭田1685

印　刷　柳本印刷株式会社
総社市総社1-10-24